家庭雜誌

第五拾四號

躰面　躰面は人の人たる所以を證す
友愛　友あるものは幸なり
オルレアンの少女　馬上の天使は
陣頭に顯れたり
花と虫　こゝにも造化の技巧存す
犬の話　如何に面白きよ
嫁形氣　人の心の色樣々

日用百科全書

每月壹回發兌
美裝壹冊洋版
二百五十餘頁
正價◎壹冊金
貳拾錢◎拾貳
冊前金貳圓拾
五錢◎郵稅一
冊ニ付六錢宛

征清軍の大勝利は、帝國の品位をして世界の第一等國に列せしめたり、第一等國々民の生活も、亦世界第一等の品格を保たざる可けんや。茲に此趣意を以て人生欠く可からざる家庭內外の必需を、平易なる文章と鮮麗なる繪畫とに由て、詳細親切に說明し、冠婚葬祭の禮法より、衣食住、衞生、看病、育兒、音樂、手藝、園藝、文通、旅行、商業、經濟に至るまで、總て本邦の生活に適實なるもののみを網羅して**日用百科全書**と題し、優美高尚なる冊子として逐次出版せんとす。讀者坐ながら、若し之に由て春風の如く、秋月の如く、清潔にして節儉、健全にして和樂なる家庭を得ば、帝國の品位更に高きこと一等なる可し。

本書目次

◎第壹編 和洋禮式
◎第貳編 茶の湯と生花
◎第三編 實用料理法
◎第四編 家政案內
◎第五編 衣服と流行
◎第六編 住居と園藝
◎第七編 手藝指南
◎第八編 實用音樂 附樂譜
◎第九編 內外遊戲
◎第拾編 商業手引
◎第拾壹編 旅行案內
◎第拾貳編 通俗書簡文

◎本書第拾參編以下の目次は追て廣告す可し

閑院宮妃智惠子殿下題字。
從一位近衞忠熈公題歌。
從三位前田利嗣侯題字。
前田侯爵夫人題歌。

（五月廿一日發行）

日用百科全書第壹編 和洋禮式

全壹冊
正價金拾八錢
郵稅八錢

閑院宮殿下御肖像
同宮妃殿下御肖像
伊勢大廟出雲大社
都下有名女學校
寫眞銅版刷◎華村
年方彩色畫挿入

人生交際の道、禮を以て第一とす。本書は世に得易からざる幾多の珍書を參考し、專門師匠の校閱を請ひ、優雅なる圖を加へ、順序よき區別の下に、反覆丁寧に冠婚葬祭の禮法、起居、言語、衣服、應對、宴遊、獻酬の諸式より、上下、父子、夫婦、兄弟、親戚、知友等の諸作法まで、凡そ和洋の禮式一切を記述す。其題書、挿畫及び製本の優美なる、亦世間に類例少し、紳士貴女を始め、都鄙總ての家庭に各一本を藏せられなば、裨益必ず多からん。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

社會叢書

毎月一編發兌
一冊十錢
郵税貳錢
十二冊完結

社會叢書は現今に於ける上層下層社會、學問社會、職業社會、勞働社會、技藝社會、婦人社會、青年社會、交際社會、娛樂社會其他種々の煩雜せる社會の組織及生活の現狀を描き、或は之に活氣活動を與え、或は之を改進改善し或は別に新なる社會を建設して新知識、新職業、新生活の案內者鼓吹者たらんことを期す

社會叢書は眞率、着實、精勵、有望なる社會を建設し、併せて其社會に立つべき人物を養成し、世界の上に大膨脹を始めたる大日本帝國の國民たるの資を形つくらんことを期す

社會叢書の主義は有益的、進歩的、平民的、實行的にして多く事實の點より議論を起し毫も空想浮誇の趣なく、其文章は簡明平易を旨とし婦人少年にても讀み易く解し易ければ有ゆる社會の人の侶伴たるべく又相談相手たらんことを期す

社會叢書 第一編 海の日本人

定價金拾錢
郵税金貳錢

『浮べる船にさも似たり』とは詩人が日本國を形容したる語なり、實に日本は四面海を以て繞らしたる、世界に比類なき大々的海國なり。大々的海國の人民は須く大々的海國の人民たる覺悟なかるべからず、殊に戰勝の餘勢に乘じて海外に國土、國力、國威を膨脹せんには、必らず海によりて其策を施さゞるべからず。其術策如何、其方法如何、海によりて國の强と大とを致さんと欲さば個人をして海軍思想を富ましめ且つ海上の事業を發達せしむべし。此書は日本人が正に爲すべき海上の職業、生活及快樂を記して我國民の海事思想の隆起を促せり、男子は素より女子も亦一讀を煩はす。

發兌元 東京々橋區日吉町 民友社

新刊

青年叢書第壹卷

武備教育

定價拾貳錢　郵税貳錢

着眼『武裝したる日本』を造らんとの新制度を抱く、故に軍人のみならず全國民の普ねく兵事を知るの急を説く、皆兵主義は獨逸兵制の如く『短くして博く』を是れ主とし、日本今後の一種至適の立案を献ず。

畫策武備教育の内圍を大、中、小學とし、外圍を社會、家庭とす、故に舊來學校に於ける生兵法を一新し、故森文部の軍隊組織を改善し、大學、高等學校生徒の爲め特案を畫し、軍隊學校間の聯絡を促がす。故に社會家庭には好摸型としてスパルタの名士リカーガスの制度を紹介す。

國防國防上の原理は萬古不易、故に原理以内日本に於る特種方畧を説き、日本の人口、歳入、地理の三大問題より割出す。

國是國民の政畧は國是を定め、國是は更に國防の主幹力を一定す、故に攻勢防禦の主幹力を論じ、西漸的大洋大陸方面に於る國是の遂行を促し、將來の政畧を『不可言不可語』の間に收む。

目次

軍國民
軍隊と學校との聯絡を開始せよ
日本の國是
軍人精神教育の大本
何をか武備教育と謂ふ
戰勝の社會及家庭
日本海軍小史
日本軍事
學校に於ける武備教育
國防の原理と日本國防策
日本陸軍小史
結論

本書は最近の統計に富み、間々兵事に老功ある某將軍の意見を挿入す。雄志遠畧を抱ける青年諸君取て劍下に翻け、

發兌元　民友社

東京市京橋區日吉町四番地

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話七十番
發行兼印刷人　頴娃孝之助
編輯人　塚越芳太郎
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

家庭雜誌第五拾四號

（明治廿八年五月廿五日發兌）

社説

躰面

人の世に立つに最も重ずべきは、躰面を保つことより重ずべきはなし。躰面を保つことは則ち自ら愛重する所以にして、又人の人たる所以を證するものなれば也。

躰面を重ずることに由らずして、紳士は果して紳士の品位を保ち得べきや。躰面を重ずることに由らずして淑女は果して淑女の節操を保ち得べきや。抑又躰面を重ずることに由らずして、學者は果して學者の位置を保ち、政治家は政治家の徳義を保ち、經濟家は經濟家の信用を保ち、教育家宗教家は教育家宗教家の天職を保ち、武人は武人の勇武を保ち、農工商人は農工商人の立脚地を保ち得べきや。

若し人として躰面を保つことを顧みさるに至れば、所謂自棄自暴したるものにして、敗德汚行爲さゞる所なく、至らざる所なく、社會の制裁は唯腕力の効果に屬し人類は忽ち禽獸と比肩すべき階級に墮落すべし。

論より證據也、今回の日清戰爭に於て我軍の連戰連勝し清兵の連戰連敗したる所以を察するに、訓練ある我兵は隊伍の觀念明確にして、如何に矢石の雨降れば迚如何に劍鋒の林繁ければ迚獨り列後に出るは軍人の躰面として何となく其戰友に耻かしく、頭上を飛ひ去る砲丸にもつとめて其頭をかゞめさらんとせしは、我軍の連戰連勝したる因由也。勝敗の分け目なる最後の十五分間を維持するは、實に此の自ら耻ぢ名に耻づるが爲にあらざるはあらず。然るに清兵の規律なき、列を

外すこと容易なる、危きを見て逃げ出すも耻る所なく人に向て保つべき躰面あるなし。何を苦でか徒らに死守せん。是れ實に清兵の連戰連敗したる所以なりし也。

躰面を保つとは反面より見れば耻を知ること也。消極的に心を感受する上より耻を知るといひ、積極的に行爲に意志に發動する上より躰面を保つといふ。故に躰面を保つといへば其語は新なれども其義は古し。日本人が古來武士道と稱して、志氣を勵まし、廉耻を尙び、一場の榮辱を以て猶百年の命を延べ若くば之を棄て、顧みざりしもの、則ち躰面を保つことの意義を其極端まで發達せしめたる也。

故に面目なしとの一語は、實に彼等が間に於て其生命と同量の重さを有するものなりき。從て又面目を施したりとの一語は、以て一世を榮とするに釣合ふべきものなりき。

然れども吾人は今躰面を重ずることを以て、必ずしも此の如き極端の意義を有せしむべしと望むにあらず。唯人々自ら其身分に相應すべき品位と廉耻心とを保ち以て社會をして腕力若くば法律以外に有力なる道義の制裁を存せしめんと欲するのみ。人々自ら己れを愛重するは、則ち其己れに對するの義務也。人の階級を禽獸の列にまで墮落せしめざるは、則ち其神に對するの義務也。

論説

友愛

國木田哲夫

愚かなる人は、決して友を得ざるなり。蓋し其の愚なるを嫌ひて他人之れに近かざるが故に非ずして、其の人自から友なるものゝ何たるを會せざればなり。

自然は之れを愛する者に負かず。人情とても然り。人情とは人のうちにある情なれども、人自から之れを解するとをつとむる時は、無窮に達する神の聖なる力となりて、彼れを祝福する者なり。人は常に痛みて吾が胸に響く人情の幽音に耳を傾くるとをつとめざる可からざる也。

然るに友情の如きは人情の尤も高尚なるもの丶一なり。たゞ之れを『交際』てふ冷やかなる文字のまゝに解しをくと、之れを深く自から省みて其の眞消息に達せんことをつとむるとは、其の差豈にたゞに愚者と賢者との區別のみならんや。

一人あり、若し友愛の情を終生解し得ずして了はらんか、其の人は不幸此上もなき者の一人なり。

何故に不幸なるか。余は願ふ、人の親たるもの此の如き疑問を其の愛する子女に向て試みんとを願ふ。若し敏捷なる子女にして『友達なき時は淋しくして遊ぶ能はざるが故なり』と答へんか。之れ眞理なり。これ已に人情自然の答にぞある。之れ小兒にして始めて答へ得る意味深き答にてある也。

友なき時に於て實際吾等は淋しきなり。小兒の時のみ然るに非ず、一生の間友なくんば一生の間淋びしきなり。ベーコンといへる學者の名言に曰く、眞の友なきこそ眞の寂寞なれ、これなくば此世は荒野に過ぎずと。

一生の間、荒野をたどる如くにして此世を暮らす者を吾等は幸福なりと云ふ可きか。

小兒の答へは眞なり。孤獨は不幸なり。されど小兒の答ふる能はざる不幸あり。此時父母は子女に向て敎へざる可からす『友情を解し得ずして一生を了はる者、必ず其の品性に欠所ある事を證するなり』と。之れ更らに不幸の事に非ずや。

友愛を感ぜずして一生を送る程の人は、己れ自から寂

寞を感ずる者に非ず。若し果して寂寞を感ぜんか、必ず友を求めて友ある可きなり。已に寂寞を感ぜず、之れ則ち其の心痲痺をるなり、いかでか人情の深き響を聞くとを得ん。

憐れむ可きは此の種の人なり。人の性を殺ろして、獸の性を養ふたるものなり。

故に吾等は友義の重んず可きを知り、友愛の情を感ずることを務めざる可からず。以て眞の友を得ざる可からず、以て人情を完くせざる可からず。

つとむるといふと之れ主眼なり。

『一見舊知の如し』とは必ずしも友情發露の第一義にあらず。此のうちに非常なる高尚の人性を示せども、其の裏面は不健全なり、諺曰く『可愛さ餘りて憎さ百倍』と。凡て是れ一時の情に驅られたるに過ぎず。人情は深し、一時の感情は其底見ゆる也。

吾等はつとめて友愛の情を耕さゞる可からず、培はざる可からず。故に忍びもせざる可からず。其のうち已に友愛あるなり、人情ある也。

恐かなる者は友を得ず、友情を耕やすとを知らざればなり。我儘なる者は友を得ず、友情を培ふとをつとめざればなり。

知らしめよ、つとめしめよ。余が子女を有する世の親たるものに向て、注意を促がすことは是れなり。

実談

オルレアンの少女

湖處子

オルレアンの少女が始めに異象を見たるより、三四年は費されぬ。彼は今年頃の婦人となれり。其間に曖昧なりし異象の意味は、次第次第に發明されたり。然して其の發明されたる異象の意味の、オルレアンの救は

る〻と、國王のレイムに於て冠するとの二事にあると、最早疑ふべからざるに至つて、ヂャンダークは決然として起ちぬ。

彼が此二個の驚くべき使命を果さん爲には、身を王の前に致さゞるべからず。王の前に身を致さんには處の知事の力に藉らざるべからず。然して彼は家庭の花たる身を以て、國事に殉せんとには、凡てに先つて父母に謀る所なかるべからざりき。然れども彼は父母の到底彼を解せざるを知るが故に、故郷トムレミイの隣村なる叔父の許に奔れり。この叔父ラキザーは頗ぶるヂヤンを愛する人にて、少女の家を訪ふ毎におみやげを以て幼なき姪女の喜びを買ふ善良なる叔父なりき。ヂヤンが爲に渠は父に勝りし知己なりき。かゝりしかはヂャンは今嘗て見し所のものを叔父に明しぬ。インスピレーションを語るヂャンが語は、渠が爲にもインスピレーションなりき。渠は身を以て姪女の使者として、直ちに往きて隣邑ヴハーコールーの知事、パードリユーの前に立ち、知事に説に姪女と其の異象とを以てしたり。知事は半にして渠を遮ぎり、「左様な姪女は送り返した方宜しからん」と、初めより省せざりき。然れども少女は之が爲に落膽せず、自から訪ひて知事の前に立てり。知事の動かざると初の如くなりきと雖ヂャンは渠を動かさずんば止まじと、叔父と共に其邑に滯在して、知事に對する要請、會堂に於ての祈禱、此二事の間に其時を分ちぬ。

此時に當つてオルレアンの少女の異象、次第に世上に流傳し知事動かざるも府民先づ動きしかば、知事も亦遂に動かされて、國王にヂャンが事を狀し、彼をオルレアンに送るや否を奏し問へば。府民の中にヂャン、デ、メッツなる紳士あり。喜んでヂャンの旅費を義捐すべきとを誓へり。ベルトランド、デ、ポーレンジイと稱する紳士あり、自から護送の任に當らんとを申し出

でたり。ロレインの侯爵あり、ヂヤンの休徵を試み、然る後大に彼の爲にせんと、彼を其の病床に延見したり。然れども彼はオルレアンの救と國王の即位の使命の外、醫治の權を稟けしにあらざるとを以て拒みしかば、侯は旅費の一部として、若干の貨幣を寄附しぬ。斯くて延見すべしとの王命降りしかば、渠等は皆其質言をヂヤンに屆み、ヂヤンは府民の一隊と街士の一隊に護送せられ、敵軍の耳目を避けて、間道よりオルレアンに向ひぬ。

ヂヤン、ダークかオルレアンに到着せしは、人力既に盡きて、天の極を待つ時なりき。チヤールス六世の心は、恐惶せる侍臣の勸告に從ひて、ドーフヒン山に遁るへき歟、忠信なる將帥の言を用ひて終りまでオルレアンを嬰守すべき歟の間に彷徨して决する能はざるの時なりき。ヂヤンが王城に呼ばれたるは夜なりき。いかめしく裝束したる將校貴族等は無數の炬火と共に庭に列ひ、ヂヤンを其前に合し出したり、チヤールスは彼が休徵を試むべく、將校の中に伍して彼を見たり。ヂヤンの慧眼は直ちに王を認めて曰く、「善良なる王よ、神は王を祝福し給へり」と。王は佯つて我は王にあらずと云ひしかば、ヂヤンは答へて「否否君こそ王にておはせ。いとも尊とき我が國王よ、我は君と君の王國を拯はん爲に遣はされたる神の使ひ女なり。我は王をオルレアンより拯ひ、レイムに於て王に冠を加ふべき使命を受けぬ。王は何とて疑ひ給ふや。神は今王を惠み王を助けんとし給ふを。」

寧ろ一種の好奇心に誘はれて彼れを召し見たる朝臣等も、此休徵に撼かされて、頗ぶる感情を一變したり。王は傍近く彼を召して彼と語り、頗ぶる彼の云ふ所に傾耳したり。

オルレアンの府民は戸ごとに救濟者に就て語り、オルレアンの救を翹望しぬ。然れどもヂヤンは猶ほ返さる丶

にも非ず、用ひらるゝにもあらずして、徒らに城中に留め置かれぬ。此間驚くべき休徴は示されたり。ある日ヂャンは兵卒の己れに悪言を加へしに答へて、斯かる悪言は其人の終近きを語れりと云ひしが後數日其兵卒は彼の言の如く、河を渉らんとして溺れ死したり。」是に於て休徴を信ずる府民の救濟者に對するの叫は王城を震動しめぬ。然れども國王は血腥しき一匹婦を信ずる能はず、將校貴族は武器に堪えざる一女子を信ずる能はず、僧官等は迷信の夢の如き異象を神學上より解剖して、其の誣妄なるを辨ぜり。

斯くして渠等は申し合せたるが如く、一時其の救濟者と呼ぶ所の少女を抹殺し得たりと雖、然れども旦夕に逼れる危殆より自ら救ふと能はず、渠等の祀、オルレアンの救を説くもの一人だになく。オルレアンの救を説くものは、唯此少女あるのみなりしかば、絶望の極何にがな望を屬せんと欲する渠等は、餘儀なく彼を用ひんと欲するに至りぬ。是に於て渠等は餘儀なく先づ彼の平生を探らんとを決し、使節も餘儀なく其の生國なるドムレミー村に派せられ然して彼の無垢清淨を證する使者の復命に由つて餘儀なくヂャンを試むるに至れり

渠等がヂャンを用ふるや、萬一を僥倖するよりも猶ほ憐むべき心中なりき。渠等は亡びて後に憾を遺さざらん爲にあらゆる手段を用ふる如して彼を用ひしのみ。其の結果の如きは豫め期する所にはあらざりしなり。」

オルレアンの少女は是に於て軍隊の前に立ち顯はれたり。彼は勳爵士の甲冑を擐け、五個の十字架を帶びたる劍を佩き猶ほ勇武隱れなき古の名王チャールスマルテルの用ひしと云ふ武器のある神殿に保存しあるものを取り來らしめて之を執り、その異象の示しに率つて榮光に於ての救世主の肖像に「ゼーザス、マリヤ」なる文字を徵せし白旗を用ひ、サー、ド、オーロンと呼ぶ勇敢

なる勳爵士、及びファザー、パスクェレルと稱する白髮の高僧に隨はれ、二人の傳令使、二人の扈從に侍せられて陣頭に立ち顯はれぬ。

殆ど二ヶ月の間、空しく神の使女の風采を想望し居りし府民は、歡呼してヂャンを迎へたり。自ら軍を支揮すべきや、將た其の現在と天佑とを以て軍隊を皷舞するに止まるやは、最初に於て疑問なりき。然れどもオルレアンの救の望に醉へる府民は、凡ての疑問を排して軍司令の全權をヂャンに與へぬ。今や其全身勳爵士の軍服に固められ其の前額に於て編まれし美しき栗毛の髮、眉間よりふり分けられ、フサ〳〵と肩までかゝりて。風に吹かれつゝ一個の娘子の馬に跨がつて始めてブロイに顯はれたる時、宛も天の喇叭の響きたるが如く、衰へたる精神は活き。仆れたる旗は立ち、絶望したる兵士は再び武器を執り、散亂したる軍隊の立どころに集中するもの六千人の多きに及べり。此の好報に接して、優柔不斷のチャールスも、決然として其志を確め、逃仕度しつゝありし朝臣等も、亦皆勃々として餘勇を生じ、絶望したりし將校貴族も、再び出陣の準備に取りかゝれり。

ヂャンが使令の第一頁は、其軍隊より凡て不德の分子を芟除して、軍人の道德を改良し、及び敵と戰ふ先づ懺悔と祈禱を以て始むべきとを宣明するより初れり。彼は尋て英軍に檄し、其不正不民に對する天よりの復讐を避くべく、速かに軍を國境の外に退け、盡く其侵地を返還すべき旨を以てしたり。英軍は彼を解せす、敗竄の餘、斯かる妖婦の力に賴らんとする、佛人の最後を憫笑するに過ぎざりき。

當時籠城兵士の狀態は、飢餓と戰ふが精一杯なりき。味方の將校の第一の目的は、糧食を市內に輸入するとにてありき。ヂャンモ先づ內顧の患を絶つに、此目的に向つて運動したり。部下の將校等が、彼に驅使せら

る丶を屑とせずして、屢彼に抗し、彼を伴り、彼に與ふるに數度の面倒と不便とを以てしたりと雖、彼は着々として其目的に成効し、ローア河より兩個の運送船を以て、兩回空腹なる府民に餉送せし時に、湧くが如き歡聲四方より彼を圍み、殊に父老婦人小兒等は、彼を見ると天使の如く、前後より彼を取卷き、彼に向つて相推しつ丶爭ひて其衣に接吻しつ丶、其の謝意を致しぬ。

內顧の患絕へしかば、彼は直ちに攻勢を取り初めたり。彼は血を流すとを避くべく、再び寄手に矢文を射、退軍すべきの意を傳へ、猶ほまた自ら馬を城壕の橋に進めて、高聲に其退軍を勸告したり。斯くして敵の動かざると初の如くなるを見、部下の兵に號令して、自から先驅して敵陣に突貫したり。激しき戰闘はれ、風塵暫らく戰場を掩ひぬ。風塵の一掃せし時、凱歌の佛軍より起り、寄手は數里の外に退きぬ。

其翌五月第五日は、救主の昇天祭なりしかば、チヤンは一兵をも動かさゞりき。其翌再び、敵軍に突貫して、彼自ら微傷を負ひしも、勝利は味方のものなりき。尋て起るもの、是れ彼が第一の使命を果すべき大決戰なりけり。此時敵は退てトールネル城を保ちたりき。渠等は盡く城壕の橋を撤し、壕なき方面には新に池を穿ち、水をローア河より引き、之を守るに翹勇無雙のグラッデール將軍を以てし、之を固むるに敵中の精英を盡し、就中其五百名を以て成り立つ一隊の如きは、ブリトンの花と稱せらる丶ものなりき。然してチヤンは其の寡兵を以て、此强塞を拔かんとせり。部下の將校の之を止めて、援兵の來るを待たしむるをも聽かず、其の親から率ひる決死軍を指揮して驅駛せしかば、部下の諸將も餘儀なく之に從ひたり。朝の十時より日中まで、拔く能はざりしかば。チヤンは梯子を城壁に懸けしめ、獨り先だち參らんとして敵に其頸を射られて、

壕中に陷り、敵兵に生擒せられんとして、僅かに衛兵に助けられたり。彼が傷は重かりき。彼が目よりは苦痛の涙漏れたり。然れども彼は其の侍者に、聖者の常に彼を慰むるとを告げ、手づから其矢を引き拔き、其疵を布片にて巻かしめ、再び戰場に立ちしかば、沮喪せんとせし兵氣再び倍し來る同時に、敵は其射殺したりと思ひし少女の再び現れ來るを見て、其の不思儀に噪ぎ、或ものは之を他のヂャンなりと思ひ、或ものは天使あつて佛軍の爲に戰へりと想像し、勝ち誇りたりし足並頓に亂れ立ち、忽ち又佛兵進路を遮れりと云ふ飛語を傳へて奔竄し初めぬ。敵將グラッテールは、敗兵を收めんとして、端なく少女の馬前に出で來れり。少女は渠を呼んで歸降を勸めしかど、聽かずして遁れしが、遂に壕に陷いつて失せぬ。此日英兵の失はれしもの七千乃至八千の多きに上ると云ふ。此大勝利に由つて、オルレアンの圍は全く解かれぬ。

佛軍は大勝利を歌ひて凱旋し、府民は歡呼して必勝軍を迎へ、會堂の鐘は此福音を告ぐへく到る處に響き、祝捷會は到る處に開かれ、軍人は到る處に其の戰狀を說きぬ。然して將校以下一人としてヂャンの功を倫むものなかりき。彼がオルレアンの少女の渾名を受けしは是時なりき。其翌日(五月八日)は正に安息日なりしかは、府民は　會堂に集まり、オルレアンの救を感謝して神を讃美し少女の勳功を頌したり。少女は感情の高潮に於て、却て父母の天非を懷ひき。

科學

花と虫（一）

竹越竹代

閑どかにも春の日長がを、花に戯わぶれ、香に酔ひ、行き暮れては草の葉陰に眠むり、起き出でゝは露に腹

を滿たし、風に驚きては落花と共に飛び、さそわれては乙女子の袖に遊び、氣樂なること是れには如かじと羨やまる丶蝶蜂も、見るべき學者の眼に入る時きは、其の忙しさは園丁の忙しさにも勝さりて見ゆるなり。そは限ぎり狹まき花園すら、常に園丁の氣付けなかりせば、劣れる種類は良き種類を壓し、勝ぐれたる花はいつしか種子を失しなふに至たるべきに。まして目も屆かざる廣原の誰れ培かふものもなきに、好き香ある美つくしき花の、年々春に開き出てゝ、雜草のために根をたやされざるは、たゞ小さき園丁とも云ふべき無數の小虫、蜂蝶の類の勞力あるによるものなれば也。

そも小虫の働らきの花と、密接の關係を有するとを、はじめて悉しく發見せしは、スプレンジエルと云ふ學者にして、又た植物の毛は、密の溢れ流かされざる保護のために作くられたることを見出だせしもこの學者也。彼れはこの面白き問題を發見してより以來、精細に花と虫との關係を觀察せるに、或る花は雄蕊のみを有する結果すべき雌蕊を有たざるものなり、或るものは雄花と雌花と所在を異せるあり、或は雄蕊の盛なる頃、雌花の未だ發達せざるもの等ありて、何づれも媒介の親切なるにあらざれば其の種子は此の世界より後を絕つへきに、風あり、鳥あり、虫ありて、ために種子を永遠に傳たふるを得るものならば爭ふべからざる事實となりぬ。中にも虫の力は、最も花のために重なる媒介を爲せり。

一方にまた植物の生理より說くときは、四の法則あり。『第一に植物の數。如何に多數なりと雖も、世界中のものを一々集つめて、驗めすと雖も、一分一厘も異なりなく、全く等としと云ふものはあらず。第二或る一と種類の植物より生ぜし、所謂子なるものは、その親や木より、何か一とつの特性を受け傳たふると。第三

果を結ぶに至る花の數は、多くの花の中にても、殊に少數なること。第四木にせよ花にせよ終を全ふするものは必ず好位地にある天運あるものにかぎること。かゝる數ず〳〵の道理あるがゆへに、野邊に入り混りたる數〳〵の草花の中にても、生を保ち、終を全ふするものは餘程の理由なくてはあらず。たとへば花の大きくして色の美しく、香よくして、蜜多きが如とき、所謂美人の才子と云ふが如き、道具立のそろひたるものは、虫の注意を引くこと一しほなるが故へに、思わず知らず、群集する虫は、各々その去らんとする時、花粉の荷物を托せられ、之を他花に送るの用を勤とむる也。虫の集るは花のためによく、花のためによければ虫も知らず〳〵之より蜜の養しなひを受くるぞ造化の妙工なれ。

虫の働きの、植物繁殖上に必要あること數づ〳〵ある中にも、荊球花と蟻の關係等は、偶然と云へば云ふべくも實に奇態なる有樣なり。こはベルトと云ふ學者の始じめて發見せし所なるが、此の荊球花と云ふ木には、葉の根に一つゝの刺あり、その付け根の所に、少しく窪みたる所ありて、各々杯の形を爲せるものゝ上に梨の果の如とき形のものをいたゞけるあり。之れぞ蟻を呼び寄する器械也。蟻はその形の甘そうなると、蜜の香とに引かされて、黒くなる迄で相集つまり、各々蜜を取り始むるに、かよわき葉の木はいかで堪へ得ん、暫時にして地上に落さるべし。さて地上に落ちたる葉は、無益の腐敗に天命を終へずして、木の子のために最も必要なる食物となる。

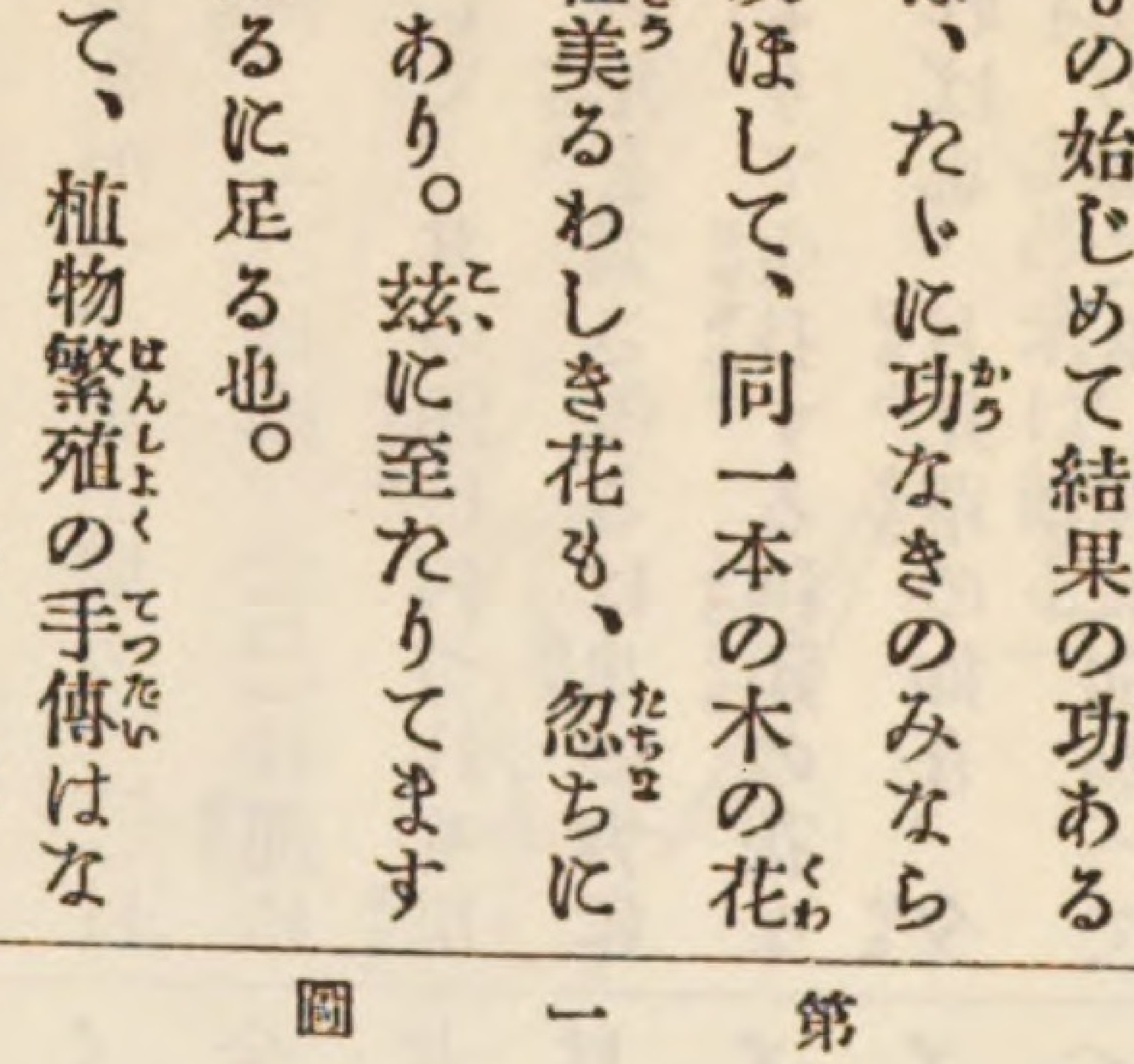
且つまた虫の力によりて花粉を運搬せらるゝ種類の植物はたとひ雄花と雌花との位地、互ひに接近して虫の力をからずして、花粉を送ることの充分出來得る場合ありと雖も、其の結果は、虫の力をかりしもの比して甚だ劣等也。ダルウ井ン氏が、全じ所にて全じ樣に成

長せしめたる全種類の六本の植物に付きて試驗せし所によるに雌雄花を甚だ近接せしめて、少しも不自由なく花粉を送らしめしものと、不便なる位地に置きて、虫の力をかりしものとを比較せしに、一方の木は七呎に達する迄で成長する間に、他は五呎四吋を越ゆる能はざりしと云ふ。それよりも、なほ甚だしきものあり。或る植物のためには、同じ一本の木の中にある雄花の花粉は、塵と變りなく、雌花のためには何の功をも有たずして、他の木より來るもの始じめて結果の功あるものなり。又た或る種類には、たゞに功なきのみならずして、全く毒の如く害を及ぼして、同一本の木の花粉にのみ感ずる時は、如何程美るわしき花も、忽ちに凋れて蔭なきに至るものさへあり。玆に至りてます〳〵虫の勞力の謝すべきを知るに足る也。

風も隨分一方ならぬ骨は折りて、植物繁殖の手傳はなしつゝ、あれども、悲しむべきは風の結べる果は、決して美つくしき色を持たず、美くしとて人に賞めらるべき見ばへ少くなき事なり、松柏、樺の木、白楊若しくは野邊にありても、人の目にも止どまらざる草の上にのみ、その力を顯わせり。すべて風の力を籍る植物は、他のものよりも多き花粉を要するは人々の知る所也。

またその種の植物にかぎりて、葉の多く混み合わざる前に、花出で、しかも莖の長き花出で、花粉を受くるに最も適當に出來たり。更らに都合の好きとあり。即ちかゝる種類の植物の雌蕊は、多く房々しき毛を有するか、或は多くの枝を有して、風の持ち來りたる花粉を止どむるに便ならざるは即ち第一圖の(一)は赤楊、(二)は蛇麻、(三)は麥なる

第一圖



が、こは何れも風の力による植物なるが故に、各々房く々しき毛を有せり。之れに引きかへ、第二圖の(一)は柳、(二)は麻、(三)は蓮にして、其の頭は何づれも房の形を爲さゞるは虫の力によりて生長する種類の花なれば也。月見草の如き、夕顔の如き、秋に向かへて特意の美花を、開らく種類の花が、虫の目に止まり易すき様に、黄色もしくは白色を備なへたる注意は、驚くべき至り也。



(三)　(二)　(一)

第二圖

植物の事を話すに當たりて、蜜のことは一言説かずしては過ぎ行かれまじ。そも蜜とは何物かとは、多くの學者が、疑の中に研究せる所にして、或る人は植物が嚙み碎なしたる食物の中にて、不用となれるものを吐き出せるなりと云ひ。或は之を以て、虫の注意を引くのみの道具となし。種々にして其説一定せざりしが、今日最も勢力あるは、パトソラト、ブレーアー氏の説にして『蜜は吸ひ込まれたる花粉、即ち言をかへて云はゞ、生長すべき精力とも云ふべきものにして、子房とて植物の卵子を養しなふに欠ぐべからざるもの也』と云ふ。されども風の力によりて結果する植物が、一つとして、蜜を有するものあらざるは、又た蜜が虫を呼ぶの道具ともなるを示めすものとも云ふべき也。

同じ虫の中にても、蠅は蜂に比して甚だ愚鈍なるを見るべし、そは蠅取草に付きても知らるゝ也。此の草は色甚だ蜜の點滴に似たる雄蕊を有し、香も肉の腐敗したるが如き香にして、虫を呼ぶには屈強の道具を具へたるものなれども賢しこき蜂はその上を通行して、蜜らしき色。肉らしき香を見ても、臭ぎても、その實物ならざると明きらかに見定ためて、決してその罠には

落ちされども、蠅は忽ち欺むかれて、草のために容易すく捕らる。之れにて雨虫賢愚の差を知るべき也。

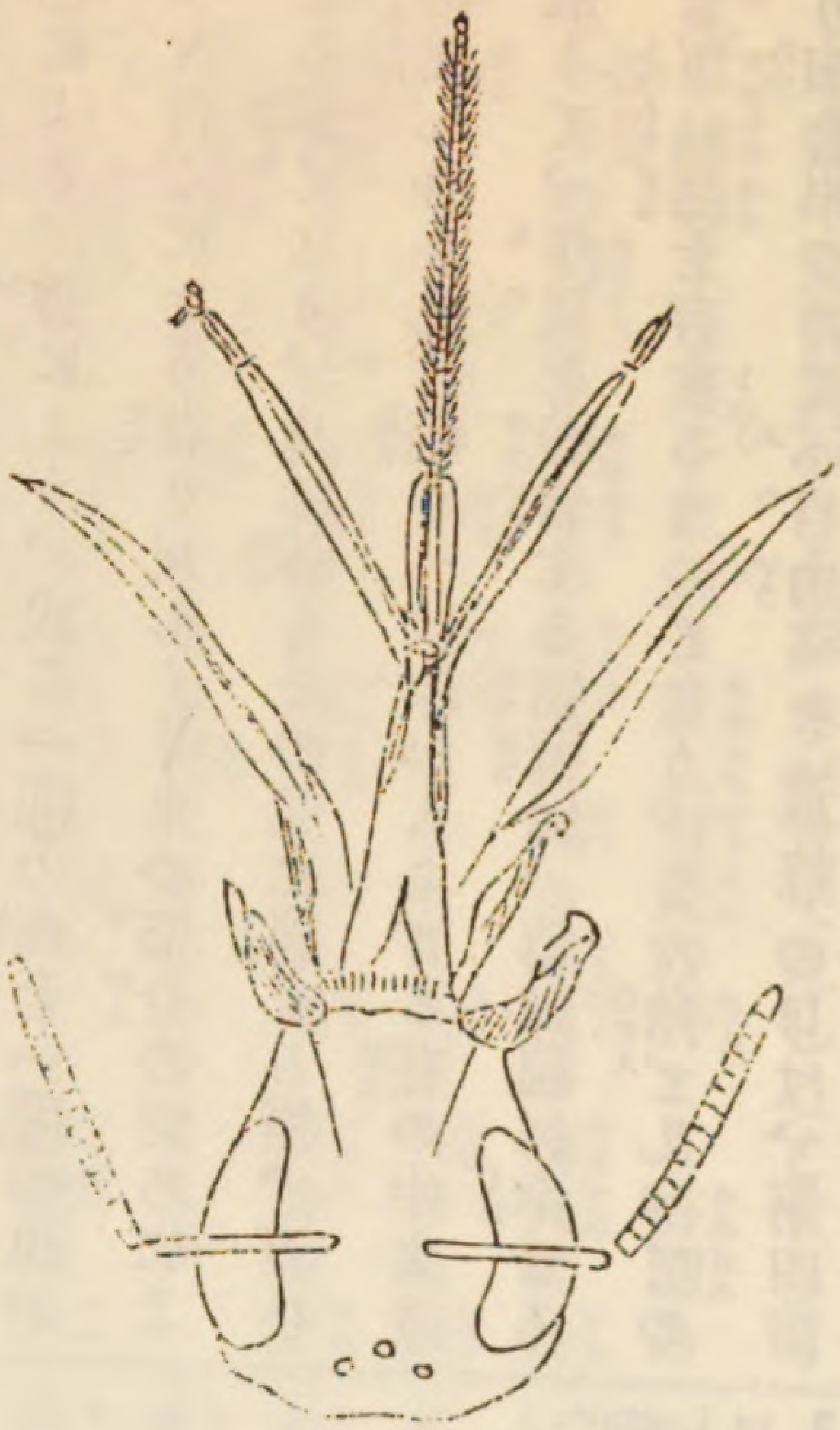
蜂の智恵は此に止らず其色の種類すら見分くるの力あり、或る學者種々様々の變わりたる色紙を並らべ、其の上に各々蜜を盛りて置きたるに、多くの蜂は其上に集まひ來たりて、各々己のが好き〳〵の色に近づきて蜜を吸ひ始じめけり。暫ばらくありて、其學者は蜂を



第三圖



第四圖



第五圖

追ひはらひ、色紙を入れ更へて見しに、先きなる蜂は矢張元の色紙の上に蜜を取り、紙を動かさば、動かす方に随たがい來りて、少こしも、その色を見誤らざりしと云ふ。

かく色により、香により、或る一種の花を一種の虫が追ひつゝ行くにより花もだん／＼虫の都合のためによき様なる形となり、虫の躰もその花に適する様、互ひに相變化し合ふ也。例とへば深からざる花の中より蜜を取りて、子兒を養育する蜜蜂は、第三圖に示せる如とき下脣を有するものとなり。また殆ど凡べての花より蜜を集つめて不自由なき黄蜂の口は、第四圖り。の如くそれ相應なる下脣を有せり。且つ又た蜜を集つむるの便、及び巣を作くるの利器は足にも備われ第五圖は蜂の足を示めせるものなるが、砂中に穴を穿がつためには其の先きに鋭どき針あり、花粉を集つむるためには、箒に似たる毛ありて、各々その目的のための利器を具へたるぞ面白けれ。

文藝

犬の話

敬亭生

卿等街上に犬を打ち、犬を縛りて慰とする童達よ、且く卿等が鞭の手をとゞめ、卿等が捕虜をさしおき、來りて余が犬の話を爲すを聞け、卿等は實に彼を打つの權理なきなり。知らずや彼立ちて歩まず、吠へて語らざる無言の友は、多くの人間よりも賴母敷事を。若し絶海の孤島に流寓するロビンソンクルソーとなり、共に語る可きフライデーもなくて、唯一の動物を擇んで吾伴侶と爲す可き事もあらば、童達よ、卿等は何を擇む可き乎。余は實に彼四足の友を擇まんと思ふなり。彼は其生命のある限り卿等を棄てず、金あれば來り金なければ去ることもなく、養へる恩に背きて却て卿等に仇なすこともなく、愛し忍び忠實にして其生

命の果に到る。翻手雲覆手雨の世の中にありては、情と云ひ義と云ふもの二足の動物よりも却て四足の人間の中に多く見出さるは、悲む可き事ならずや。

吾愛する童達よ、卿等は曾て聞きつらむ、犬の種族は人間の種族よりも殆んど多きことを。即ち一頭の價五千弗にも上る聖ベルナアド犬より與ふるも貰ふ者なき無主犬に到る迄、犢の如き巨獒より掌にも眠る可き小きテリアルに到る迄、五つ重ねし縮緬の坐蒲團に埋れて日本國中幾百萬の子供が未だ曾て見しことすらもなき見事結搆なる菓子に飽き貴人寵愛の狆より芥溜あさりて一本の朽骨を大牢の珍味と嚼る無宿の瘠犬に到る迄、走ること飛ぶが如く怜悧なること人に劣らぬ獵犬より頑鈍なる背戸の權作が飼犬に到る迄、彼等の才不才、遇不遇、善不善、もまた實にさま〲なり。

日本の犬の親類なるエスキモオ人の犬のよく氷雪の上に橇を曳ひて走り、アルプス山家の犬のよく雪中に凍死せる旅人を救ひ、新田左中將の勇臣畑時能の狗のよく戰を助け、猶太の荒野に羊牧ふ牧者の犬のよく羊を監督し、西郷巨眼翁の犬を愛して常に起臥を共にし曾て獵の道に三人前の鰻の蒲燒を注文して二頭の犬と共々に食ひ盡せる、ビスマアクの犬を愛して曾て其一犬病死せる時慟哭して死骸の側を去らざりし、支那の某氏の犬の河南より江南數百里の遠途を頸に手紙を入れし竹筒を下げて往來し飛脚の名代を爲せる、ジヨンブライト氏の愛犬の氏の病床に侍して須臾も其傍を去らず氏没するや悄々として食を絶ち哀痛面にあらはれし、此等の事は卿等已に知れるもあらん未だ知らざるもあらん、歴史に於ても、物語に於ても、日常の生活に於ても、人の伴侶として犬は尤も其著しき位置に立てり。

余は尤も犬を愛する者なり。幼より犬を愛して愛育

に入れり。余は昔も猶今の如く極めてシヤイなる性質なりき。故に余は小兒と遊ぶよりも獨り犬と共に遊べり。犬と遊びて衣は土に塗れ、裳は引裂れ、家に歸つて叱らるゝこと幾回なるを知ざりき。余九歳の時一疋の小狗を得たり。彼はやう／＼にして長じ、極めてよき犬となれり。明治十年二月西郷の亂起れり。余が家は熊本城下にありしを以て、一家亂を避けて僻村に行けり。行く時、余犬を伴ひ行かむとするも、彼は家を離るゝを肯せず、却て余が裾を曳き、余が車の轅に攀ぢて、余が顔を仰ぎ見て悲鳴數回せり。四月の末に到り。熊本城の圍解け、余等は僻村より歸れり。歸れば庭園荒れて、塵埃壘を埋むる數寸、柱壁に彈丸の痕點々、生けるものとては咲殘りし菜の花に飛ぶ蝴蝶のみなりき。家の監督を頼みし隣村の男某に犬の所在を問へば、彼は答へぬ、一家去り給ひしより彼犬は始終庭にあつて家を去らず、某其餓へんことを慮りて毎日握飯一箇づゝ持ち來りて與へ申したるに、一日來り見れば杉籬のほとりに血流れて犬の頭横はり其骸の見へず、偖は薩州人等が此處へ來り吠へかゝる犬を見てよきものなれば直ちに斬り殺し其肉を煮て食ひしにて候はんと思ひ、頭は彼桃の木の下に埋葬致して候」と。之を聞くより余は放聲大哭、終日食せず終夜眠らざりき。余は告白す、當時余に取りては南州及其八千の子弟の最期よりも、寧ろ余が一疋の犬の死が更に悲しかりしことを。

吾愛する童達よ、卿等は滊車を追ふて走れる犬の話を聞きしや。時は十四五年前の事、所は京都七條の停車場なりき。滊車まさに發せむとする時、一洋人あり走りて滊車に乘りぬ。洋人のあとより一頭の犬從ひ來りしが急遽の際終に之を乘せしむるを得ず。滊笛は響きぬ。滊車は動きぬ。洋人は車窓より頭を出して犬を呼びぬ。犬は滊車のあとを追ふて走りぬ。向日町停車場

に到りし時は犬は已に五分時おくれたり。列車はます〳〵南に向つて走りぬ。犬もいよ〳〵其跡を追て走りぬ。列車の過ぐる道傍にありし者は、滊車の過ぎしあとより、一頭の犬の飛ぶが如く走り行くを見て、何事なるかと打驚けり。列車は二時間走りて神戸の停車場に着きぬ。彼洋人は車を下り茶屋に憩へり。憩ふこと三十分ばかり、一頭の犬喘ぎ〳〵走り來りて洋人の足下に倒れぬ。彼は京都より神戸まで一路滊車のあとを追ふて走りしなり。彼の脇腹は波の如く動き、其赤き舌は燃ふるばかり打喘ぎ、口角に白泡を吹ひて苦悶に堪へざるものゝ如くなりしが、猶尾を打振り主人の靴を舐りつゝ、頓てハタト倒れて息絶へたり。洋人は群衆の前にも憚らず、犬を抱きて哭せり。

吾友某語りけるは、友の家に年頃飼ひ馴れたる白犬あり。一家外に移らんとすることゝありて、之を海を隔てし向ふの島の住人に與へしに、其翌日青戸よりホト〳〵歩み來る者あり、誰そやと見れば例の白犬總身ヒタ濡れに濡れ、喘ぎつゝ立ち居たり。彼は實に五里の海上を泳ぎて歸り來りしなり。是れより彼れが膚毛は悉く禿落せり。

數年前越中富山の藥賣何某去る野原を通るに、穢多ありてまさに犬を殺さんとなし居れり。犬は藥賣の顏を見て、悲鳴して救を求むるものゝ如し。何某哀れんで爲めに命を乞ひ、犬の代として金壹圓を穢多に與へたり。然るに穢多は其男の金を取り出す時、財嚢に金多きを見て、忽ち惡心を生じ、其の背き去るに臨むで、竊かにあとを跟け行き、棒を振つて其男を撲殺し、其路費を奪へり。犬は殺されし男の死骸を守りて一聲悲吠し、夜の明くるより早く近村に走せ行き、村人の衣の裾を曳ひて彼野原の死骸のもとに連れ來れり。而して村人驚きて殺害者を尋ぬるに及び、犬は村中を走せまはり、我穢多を見るより早く其足に嚙みつきぬ。罪

人即ち明らかになりて罪に伏せり。童達よ、斯る話を數へ來らば、一年書くも書き盡くさじ。人は浮薄に流れて情義は却て四足の動物に存す、思へば耻かしき次第ならずや。

嫁　形　氣

此篇は裏店の花嫁子を書て見ましたので、花よりも、紅葉よりも、月よりも、澄渡る天の色よりも美しく淸からんことを期する我雜誌に、此篇は少し不向でしたが、然し裏店社會の花嫁子の事は、書ないから書ないのだらう、と思ふお方が有る、と殘念びんしけん、と申す洒落ですから、失敬を顧みず、載る事としました

嵯峨の山人

夫婦と申しゝも
實は出來合に候
花嫁と申しゝも
實は山の神に候

四

無用の者不可入と差配人の名筆を以てたッ筆にかゝれてはあるが、其實無用の者が這入るとも、決して咎る人のないのが東京の路次で、間三尺を隔て建られた兩側の家、其には如何なる人が住で居るのでせう歟、其三尺の空地さへ、一尺は小さな溝が通て居るなれば、路次を人の出入する度、足音のがた〱とするやかましさ、一隅には總雪隱と掃溜とが有るが、其掃溜には折々紙屑拾ひが參ッては、其山の如き芥の中に、何歟錢になるものが捨ては無らう歟、稀には珊瑚樹の玉でも捨て有さうなものだ、とかきまはしては見るが、何しろ貧乏人の多い堪忍長屋の事、何が有ませうぞ、一寸お向ふのお上樣、と呼掛たのは十八九の女、是は米ちやんといふて、此頃此長屋の熊樣の所へお嫁入を

なすッて、臺番所の御方と御出世を遊ばされた花嫁ですが、其實前からのおッとちで、度々熊樣所へも遊びに來た事のお在ゝなり、近所合壁の噂の種となッたのみならず、隨分人見知をしない御性質故却て此方から御挨拶に及ばれて心安くなり、其故熊樣も隣近所からやれ色男で候の、それ女殺の罪作で候の、此頃は寧お瘦だよ、女の子で苦勞をすると見えてなど丶からかはれて、熊樣大變に恐悅した程の中で在ッた。然るに此頃中へ這入る人が在て、夫程思ひ合た中なら夫婦になッたら宜らう、と此子の兩親がいざこざを申したのを、やう／＼納得させて、つい先月御輿入、女は氏なくして玉の輿なら宜が味噌越をさげて、豆腐屋へ卯の花を買にゆく身の上、其も卯の花と申せば、大層おいしさうに聞えるが、俗に申すお殼の事、思へば哀な御身の上です、

此子名をなると申して、名は其躰を現はすと申す譬に洩れず、隨分のおしやべりです。

然し流石に東育丈の事は在て、衣服の着こなし、身のふり容、物ごし格好には言はれぬ婀娜ッぽい所が有ます。

洗ひ髮に一寸薄化粧をして、華美な紺がすりの單物を着て、唐繻子と淺の葉の腹合の帶を、さわらば解さうにざッかけなく結んだ風、手足の指の爪端尋常で雪より白く、如何にも可愛らしいのですから、熊樣が俗魂惚込んだのも無理のない所です、

一寸お向ふのお上樣、少遊びに入らッしやいましな、お茶を入ましたから、否、何も有ませんがね、昨日榮太郎の最中を貰ひましたから、ハア熊樣です歟、否不可ませんの、だ丶計こねて、今朝もねぐづ／＼して仕事ゝ徃まいとして居るのですのよ、其をやッと出してやりましたのと言ふ所へ、向ふの上樣來る、さあ入らッしやい、よく入らッしやいましたとにこ／＼しなが

ら蒲の敷物をさし出してまあお敷き遊ばせ、お敷なさいよ、疊がきたなうございますから、さあ一吹めし上れ、粗葉でございますが、（と長羅緒の煙管と煙草の箱とを勸めて）へエ、何ですッて、おや嫌だ、嫌なお上樣だよ、冗談計言て、お樂しみ所です歟、お苦しみですわ、其樣あなた事は、皆昔になッてしまひましたのさ、まあ聞て下さい昨宵もね、二時過に歸て來てからに、何を言ふかと思ふとね、やいお米、手前の樣な不形氣な奴は有はしねへぞ、予あもうつく〲嫌になッた如何だ別々にならうではねへ歟、と咄嗟斯さ、餘り憎らしいからね、私もむしやぶり附て、咄嗟二の腕へかぶり附てやッたの、するとね、私の髷を咄嗟ひッ掴んで横面を嫌といふ程なぐッてからに、間抜奴、直に本氣にして吠やあがらあ、恰で山犬見た樣だから、うッかり冗談も言へやあしねへ、と私を突飛してね、酒をつけろと斯さ、私も虫のある人間だから默ては居やあしない、へエ好加減に人を馬鹿にしやがれ、何處の國に其樣夜深小深に歸て來て、酒をつけろのなんて御諚をいふものが有るへ、酒なんぞは無よ、眞個に、人を面白くも無、何處を今迄うろ附て居たのだへ、だりむくれ切て計居て、知て居らあ、みんな、と口惜しくッてならないから、浴衣の袖をぐッと嚙んだらね、覺ひずびり〲と來ましたの、其で倘癇癪が起ッたからね意地にかゝッてびり〲〲と食さいてね、其處へ突伏して居たのですの、而したら仕方がないものですからね、自分で床を取て臥て仕舞ましたのよ、而して今朝になッて宜では有ません歟、少も予は其樣覺えが無、昨夜は余ッ程醉てたと見えるッさ、眞個に仕樣が無では有ません歟ねへ、此頃は其樣ですのよ（と談話半に、表を岡持を提た女通る、目早く見附て）おやおりん樣、素通り？餘りね、一寸寄てお居でな、なに？‥急ぎ？お嬶だよ、何處へゆくの、お祖師樣、へ

ソ其樣にめかして、誰歟に見せやうと思ッて、似合ふよ、寧意氣だよ、博多の丸帶が、おや冷かす？　馬鹿な、其樣人わるではないは、（一寸會釋してゆき過るのを）一寸まあお待よ、あの人に宜しくよ（大きな聲で言て一寸舌を出し）あの子も大變色氣附て、寧生意氣になりましたねへ、へ、ヱ、、器量は一寸して居ますがね、愛敬のない子でしてねへ、あれで旦那を取たいと言ッて探して居ますのだがお袋が鷹の爪と來て居ますからね、少しは口も懸る樣ですが、如何もまとまらない樣ですのさ、（と話して居る所へ今日はといふて女房らしき女、三四歳の小兒を抱て這入て來る）おや叔母樣今日は、暑いぢや有ませんかねへ、眞個に蒸されさうですのねへ、梅ちやん、先きは大變お泣で有ッたね、如何したへ、お灸を？　おや〳〵其はわるかッたねへ、嫌なおッか樣だねへ、あつ〻なんぞをすへて、さあ此處へお出、好物をあげるから、（と最中を三ッ四ッ取てやッて）さあお上樣召あがれ、叔母樣もおあがんなさいな、（如在なしの隣の叔母樣なるの髮を見てほめる賞められて嬉しく）、否、不可ませんの、此頃は寧短くなりましたよ、先の中は斯して居て梳と、疊へ引ずり〳〵しましたのが、今では此樣になッて仕舞ひました、へ、ヱ、、お繁樣ですの、あの人も上手は上手だが、如何も根が下り過ましてねへ、其にお饒舌でよく種々の事を言ひましてねへ、私なぞの事も、大層彼方此方へ往てわるく言觸すさうですのさ、だからもう廢うかと思ひますがね、他に好人がないものですからつい彼人に賴みますの（と話て居る所へ、虎樣といふ勇肌の男表から口をかける）おや色男何處へお出だ、まあ一吹やッてお居でな、なに左樣しては居られない？　歸さないよ、此處は羅生門だから、まあ好やね、晩迄遊んでお居でな、晩には歸て來るから、寄へでも往て見やう、なに歸る？　情無だねへ、遊んでお居で

ッてば、遊んでお居でよ、話が有るんだから、なに急しい、ほうだ（と肩をすぼめて）色廻はりも凄じい、色の方で逃てゆくは、と辯舌四隣を驚かす之で花嫁とは、あらまあ天晴の御事に候

ローラン夫人とカンチー姉妹との交り

鐵斧生

佛國革命の花、千歳の女丈夫ローラン夫人の傳は、本誌第十九號以下に連載せられ、其の花々しき生涯其の悲慘なる最後、已に十分讀者に紹介せられてあるなり。

其のうちに曰く、

『四歳にして書を讀むことを知り、八歳にしてプルタークの英雄傳を讀みて千載の前に生れざりしを嘆ける此の少女は、十一歳にして尼庵に入り一年の間宗教上學問上さま〴〵の修練を積みたり。此尼庵にありし間に、彼女はソフィー、カンチーなる一少女と相識り、其心に漲れる愛情を友の上に注ぎて、一たび相別るゝや間斷なく書信を往復し、或は夜半に起て書を認め、其友の書翰は絶へず衣兜に藏めて時々出し讀みては自ら慰むるなど、宛ながら初戀の夢濃やかなる少女の如くなりき』と。

余は今此少女等の間に起りたる友義を、更らに詳細に説かんと欲するものなり。故に讀者幸にローラン夫人の傳を再讀して新たに此女夫丈の一生を顧み、而して後ちに余が語らんとする此の美はしき物語に入らんとを望むものなり。

故にローラン夫人のみに關したる事柄は凡て言はず、之れを十九號以下の傳記に任かし置くものと知るべし。

マノンフィリボン（ローラン夫人の幼名）は尼庵に在りて、他の少女等が遊戯にふけり飛び廻はる時に、靜かに樹蔭に坐して讀み且つ考へぬ。

されど斯る幸福の時、マノン猶ほ一つの不足ありき。マノンは朋友を欲しく思ひぬ、彼女の如く眞面目にして彼女と等しき趣味を有し、互に靜かに語り得る程の朋友もがなと願ひき。而して其の願ひの如く朋友現はれたり。

尼庵に寄宿せんとてアミーンより二人の少女新たに來りぬ、即ちカンチー姉妹なり。此の姉妹が尼庵に來る事は前以て通知ありたるが故に、寄宿の少女等は皆な待ち構へ居たり。時は夏の日の夕暮近き程なりき、少女等は凡て外に出で、菩提樹の蔭を逍遥しつゝありしが、忽ち叫びて曰く『彼處に！彼處に！』と。之れカンチー姉妹が到着したるなり。

姉なるヘンリエックは此時恰かも十八歳なりき。妹を世話するために來りしなり。妹のソフィーは此時よう〳〵十四歳になるかならぬかにて、哀れ父母の膝下を離るゝが悲しく、其の優しき顔を掩ふ白紗の覆面は、眼一ぱいに含む涙を隱しき。

ソフィーが此悲しげなる樣子を見て、十一歳なるマノンフィリボンは痛く其心を動がしぬ。且つソフィーの風采はマノンを喜ばしめたり。此の二人は忽ち離れ難き仲善しとなりぬ。ソフィーは散歩を好み又た讀書を好みき、彼女は推論し、回想し、分類し、議論せり。彼女は又た語ることを好みき、然るに幸にもマノンヒイリボンは聽手の上手なりき。

姉ヘンリエッタは此の二人と共にすること稀れなりしが故に、要するにヘンリエッタとマノンとの交情は、其の熟すること甚だ遲々なりき。ヘンリエッタ尼庵に在りては別に同年輩の一少女と親しく交りたり。

マノンマイリボンは尼庵に留まること一年にして家に歸

り、カンテー姉妹と別れざるを得ずなりぬ。されど此の離別は以て彼女とソフィーとの友愛を止むる能はざりき。マノンはソフィーを見んとて屢々尼庵を訪ひけり。されど訪問の談話位にては滿足する能はずして二人は書狀を以て之れを補ひたり。マノンが作文の趣味を得、己れの言はんと欲する處を容易に筆に上ぼすを得るに至りし事は、全く此の交情熱き書狀を書き習ひし結果なりし。

暫時の後カンテー姉妹も亦た父母の家に歸りぬ。マノンとソフィーはあれよこれよと色々の樂しき約束を爲したり。ローラン夫人(マノン)の自記に曰く、『今や余が最愛の友との書狀の取り遣りは甚だ規則正しくなりぬ。余は毎週一回又は二回の書狀を送りぬ。「何を其れ程に書く事ありや」と汝は問ふ。されど余が見し事、考へし事、感ぜし事の數々、余は實に語る可き材料を澤山に有しき。此等の書狀は余に取りて極めて有益なりき。余は此の如く思想を交通するヿによりて、更らに思ひを煉るヿを學びぬ。余は自から學び得たる事を報知すが樂しさに更に苦學を忍びぬ。余は一層よく記述せんものと、更らに注意して事物を觀察したり』と。

然れどもソフィーはマノン程には書かざりき。盖し彼女は時間を他の方に用ひざるを得ざるの必要ありしが爲めなり。さり乍らソフィーはマノンよりの書狀を甚だ珍重し自からも務めて出來る限りは書狀を出したり。此等マノンの書翰は後ちにカンテー家の寶物として保存され、千八百四十一年に出板せられたり。此のうちには千七百七十二年の正月より千七百八十年の正月に至るまでの殆んど間斷なき書翰を載せり。

(續出)

病中日記

藤島ゆき子

窓をうつ雨の音におどろかされて枕もたぐれば、飲むものを求むるにかと母君のの給ふ。いな今は何時になり侍ぬらんといひつゝ、かたへにおける小さき時計を見れば、未だ三時頃なり。さらば今志ばしが程はとふすまをかづけば、母君御手さしのべて、冷えやせんと肩のあたり叩きなどし給ひて、われも志ばしまどろまんと衣かづき給ひぬ、燈火のまだ少し消え殘れるに見れば、目はふたぎ給へど、夜もおちゐてねぶりまさぬにやと泪こぼれぬ。父母の君の上など何くれと思ひつゞけゐたる間に、いつしかねぶりたりけむ。昨夜の雨なごりなく晴れわたりて、窓ちかくさしいる朝日の影、ふしどの中ながらいと／＼心地よし。母君、牛の乳などたまへば、頭あぐるに、おのが心をなぐさめんと、いつの程に母君のもの志給ひぬらん、枕がみなる花がめに、桃櫻などいと多くさしてあり。あな美くし、けふは心地例よりもよきやうなれば、歌よみてむなどいふに、母君、いと喜ばしげに打笑み給ふ折から、親しき友の許より、いとねもごろに病のありさまをとひおこせぬ。返事かゝんと筆とりたるに、かしらおもくなり行き、昨日よりのつかれ出きて、またもねぶり初め、やう／＼人々の晝け終へぬる頃目さめつるに、左手には先の書を持ちしまゝなりけり。ふしながらいと短かう返事かきて、四日五日の間なれどいと／＼なつかしきに、花がめの櫻を一ひら書の中にまきこめぬ。また庭なる山吹一枝手折らせてともに、

よそへつゝあはれと見てよ昨夜の雨の
　　つゆに志をれし山吹のはな

紙のはしにかきて、母君にも見せまゐらせなどしつゝ、いたく心地よきまゝに、鏡とひて見れば、髮の亂

れはてたるをかきわけなどする程、かなたにて、昨日よりは顔の色のよきやうなりと、母君にさゝやき給ふ父君の御聲もれぬ。いと〱嬉しく、かたじけなきあまりに、

　かりそめのわがいたづきをかくばかり
　おもほしたまふ事の尊とさ

たそがれ頃、客人の君音づれ來給へり。起きいでゝ、九時すぐる頃まで、何くれと物語しゐたれど、樂しかりし故にやあらむ、つかれたりともおぼえねば、歸りましたあとにて、このほど怠りゐたる日記などかきつく。

唐野の春

在清國　松琴生

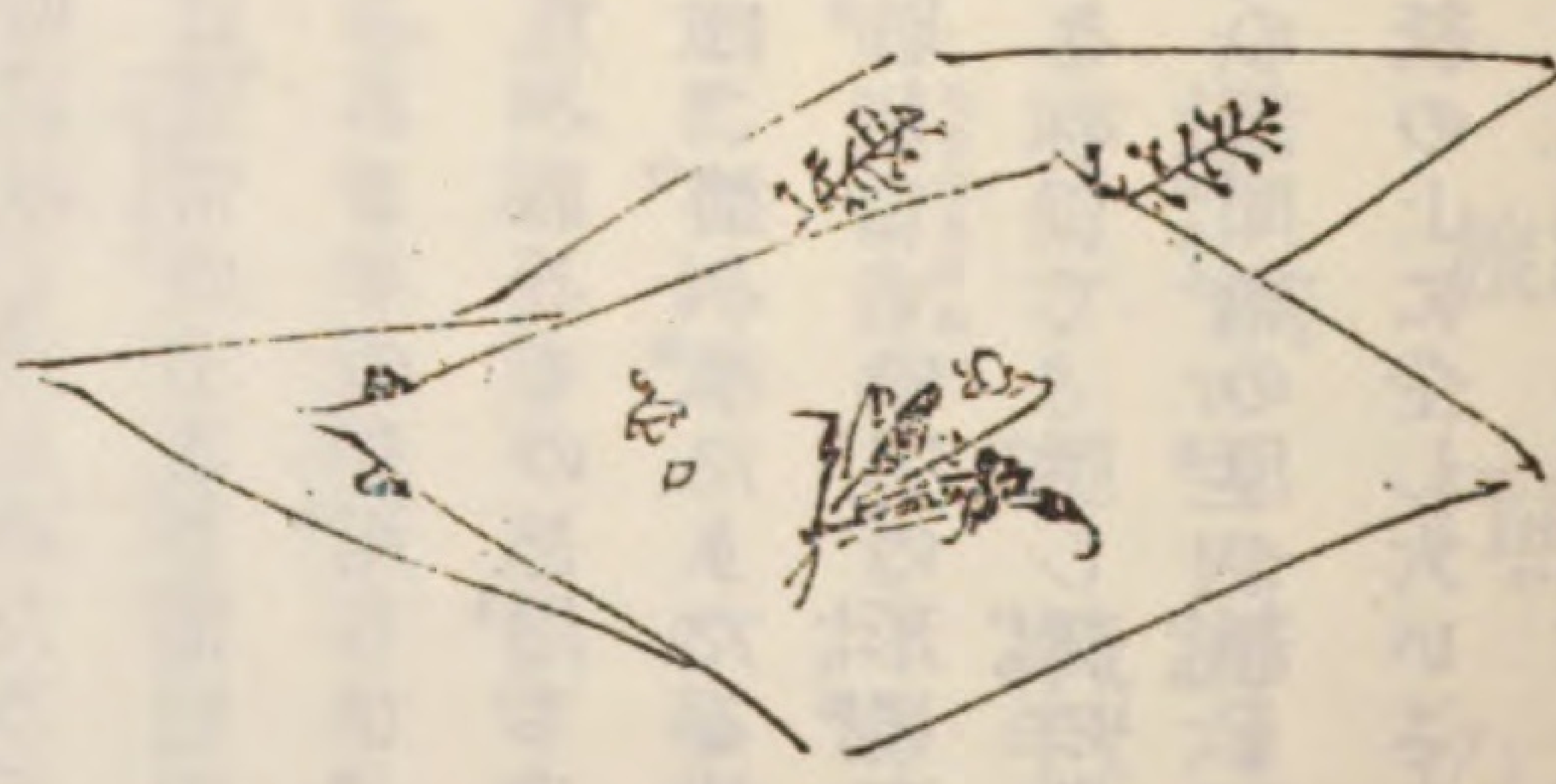
虎の臥すてふ唐土の荒野の春を來て訪へは
過しいくさのあとゝめて　吹き來る風の音さみし」
たか墳墓か白くもの　かゝる岡邊に亡き魂の
恨もこむる菫艸　崩ゆる樣さへあはれなり」
彈丸に折られて寂しくも　殘る河邊の糸柳
たが爲としも白露の　玉ぬきとめて織りはへる」
昔しゆかしき唐人の　家居ののきもあれはてゝ
ひとりまがきの桃の花　知らずがほにも笑ふなる」
住みのこりたる民草の　つれづれわぶる山里を
こむる霞にまがへぬる　かまどの煙りかけ細し
寒さにたへしつはものゝ　薪木のしろとなりにけん」
くむ人もなき山の井の　水にうつろふ花もなし
ねぐらうしのふ山鳥の　なき行く聲も忍はるゝ
かはる野山のおもかげに　はかなき世をやうたふ覽」
見渡すかぎりはるばると　なかめはおなじ草野原
めぐみあまねき春の日の　光りのみこそてりまされ」

家政

小兒敎育の一助として

植物採集法

百聞一見に如かずとは、小供を敎育の任ある父母敎師の、一時も忘するべからざる旗記るしにして、未だ多くの物を見ず、多くの智識を腦に貯くわへずして、所謂抽象的に物事を想像し得ざる小兒等には、出來得る丈け、凡べてのものを實際につきて、見せつゝ説明するを賢しこき敎育の法方とす、されば例とへば動物の話しを爲さんと欲せば、出來得べくば、動物園の如とき所に伴もなひ行き之れが象之れが熊と一々實物を見せつゝ、その話しを爲すかもしくは後園の小動物に付きて説明するときは小兒の心に覺ぼへ込むと確しかにして、中々に忘するゝものにあらず。植物の話しを爲さんと欲するときも又た同なじ、能ふべくは野邊に出で、咲きそろひたる花に付き、或はその色その形、深かくは種類屬別の高尚なる事に至る迄で、目にて敎しゆるにしくはなし。されども植物は動物と異となり、自然に庭先き等に飛び來るとなく、掃除行き屆きたる庭にては見るとを得ず、野邊に遠きしかも人客込み合たる市中にては、中々に見るとを得ず年中生命を保もつものは松柏の外にはあらずして、之れを實地に見せしむる場合甚だ少



くなし。故へに心ある父母は容易やすく草木を集つめ得らるべき時候をあだに過ごさず、無益なる物見遊山に大切なる時間と金錢を冗費する事なく、己が慰ぐさみを犧牲として、小兒の智識を增進せしめん爲め、暇あらば空氣の清よくして智識の花の集つめある健康なる野邊に遊そび、廣ろき野邊より百草を集つめ、これを乾燥して保存せしめ、年中植物を實地に見得るの幸ひを與へしめ給へ。これ健康と智識と慰みとを同一時に得るの、賢しこき仕方なる也。

植物を乾燥して貯くわゆる法は乾腊葉もしくは死せる花園と名づけて、早やくより、植物學者の美術として修練せし所なるが、大學の植物園、もしくは上野の博物館に行き給へる人々は、生きのまゝなる植物が、紙に張りつけて、額の如く並らべあるを見給へるなるべし、乾燥の植物と云ふは之れの事なり。

さて此の植物を乾燥せしむるには如何に爲すべきやと云ふに、別つにむづかしき事にあらず。本式に爲さんとするには、それ〳〵の道具もあれども、素人が間に合せのためには新聞を十枚か十二三枚合わせたる厚つ紙と、吸濕紙と重しのために用ゆる石とにて充分也。この石は通常の小さき植物のためには五個の煉瓦石位の重もみあるものを用ちひ、大なる植物のためには十個位の重みあるものを用ちゆ、さてかく道具の揃ろひたる時は、摘み來たりたる植物を、長がきものは四五寸位に切りて∨の字の形になすか、或は‖の字の形に並らぶるかして、壓し紙の間に狹さむべし。壓し紙とは先きの新聞紙の厚つ紙を五六寸角に切りしもの也。その厚紙の上に仝し大いさの吸濕紙をのせ、その吸濕紙の上に乾燥せんと欲する植物を上せ、或る葉は表を顯わし、或るものは裏の見ゆる樣にして、その上より又た吸濕紙を上せ、その上に又た厚つ紙を上せ、上よりおもしの石を置く也。

完全なる標本を造くらんと欲するには、廿四時間毎に厚つ紙を取り更へて、一週間計りの間、毎日濕氣の紙に遁りたる毎に取り更ゆれども、眞似を爲すには一度も更ゆれば澤山ならん。若し甚だしく濕氣ある植物に出遇ふときは、紙の上より火のしをあつるも可也。かくて水氣の全く去りたる時は壽洋紙の如とき白き凹たき紙の五六寸に切りたるもの、上にのせかへて、幹を糊にて張り付くるか、もしくは細そき紙にて帶の如く、ところ／＼を張り付けて、落ちざる樣に止め、隅みの明きたる所へ植物の名屬目、或は採摘取りし場所、日時等を記載し、長がく置かんとするには樟腦を入れたる箱、もしくは引き出し等に入れて保存しをくべし。

小供の時よりかく科學を遊びの内におぼへ行かば、長じて後の智識の助すけとなると少々のとにあらざるべし。今日の時候は熱つからず寒むからず、野邊の遊びには最も好く、草花は今を盛かりと競爭して咲き揃ろへば心ある母は、その子を携へて野邊に遊び給へば智識と健康とを合ひ拾ろひ給ふ可し。

旅行の用意

さなきだに、春の三四五六月頃は、旅行人を以て滊車を埋むる時候なるに、今年の如きは博覽會あり、出入の兵士の送留會ありて、旅行人の多きこと幾數倍なる中には旅になれたる人のみはあらず。旅になれたる人は餘まりに旅を易すきものと思もひて、持ちて邪魔ともならざるものを持たざるが爲め、無益なるものを出先きにて求とむるの恐れあり、旅に慣れざる人は旅を餘まりに不便と思ひ過ごして、不用なる道具を取りそろへて道にて困まるとあり。旅行の種類と時間の長短によりて、一概には云ひ難たけれども、通常一ヶ月前後の旅行のためには、左の道具揃ろへにて大抵は充分

也。

(一)けつと　(二)洋傘　(三)手拭
(四)はんかち二三枚(五)小刀　(六)半紙
(七)鉛筆　(八)手帳　(九)齒ようじ
(十)卷紙狀袋　(十一)はがき　(十二)櫛道具(婦入)
(十)三針道具(婦入)(十四)石鹼(婦入)　(十五)ふろしき
(十六)マッチ　(十七)用心藥一二

右の外にはシャツ一二枚、足袋一二足、雨のため兼寒防用外套及び一二の書物あらば充分也。書物等は多く携へたりとて、とても讀み得るものにあらず。荷物の多ほ過ぐるは困るとて、入用のもの、しかも邪魔ならざるを持たざるは不便也。右の品々は必要にしてしかも嵩ばるものはなし。大抵の旅行には是れにて澤山也。

料理の寶箱

折角の珍物も、料理の度合によりては、甘くもまづくもなる。中にも野菜ものは、そを煮るの時間の過ぐるときは、解ける形を失しなひ、早やきに過ぐれば、固たくして食に堪へず、料理人の心得の餘程必要なるものなり。左は經驗ある料理人が野菜を煮るに必要なる時間を記るしたる表にして、時候がら野菜もの丶多き此の頃ろは、家々の妻君一見せば、多少の裨益する所あらん。

玉葱の若かきは　三十分長じたるは四十五分
馬鈴薯　二十分乃至三十分
豌豆　二三十分
蠶豆　二三十分
西洋うど　十五分乃至二十分
玉菜　三十分乃至四十五分
甘藷　十五分乃至廿分
芹及びうど　八分乃至十分
筍　四十分乃至五十分

蒸　二十分乃至三十分

料理法

甘藷も今ま一ヶ月もたゝば、老るきは種子切れとなり、新たらしきは未まだ實入り悪しくして、食に堪ゆべからず。今年の名殘りに甘まき料理法一二を記るさん。

貝焼いも

甘藷の皮をむき生まにておろし、蛤と味噌とを混じ貝の中に入れ、蓋たをなし、蒸す道具あらば蒸すを可とすれども、道具なき時きは、鍋の上にて焼くべし。

腐衣いも

甘藷を生まにておろし、その中へ湯出たる豌豆を入れ鹽砂糖にて加味し、腐衣にてつゝみ、上を干瓢にてくくり胡麻油、もしくば牛の油にてあげ正油をかけて食すべし。

かすてらいも

甘藷を生まにておろさば、なほ可なれども、澤山作くるには湯出たるいもを摺りつぶさば早く出來べし。さて摺りたるいもと雞卵と鹽砂糖とを混和し、うどん粉を入れて少しく固ため、焼き鍋に油をひきてその上にて焼くべし、生まにておろしたるいもは、雞卵を加へて焼かざる前に、一度蒸さゞれば目中に通らざるべし。

うどんいも

前の如とくいもを生まにておろし、之れにうどん粉を混じ、少量の鹽を加わへて、うどんをのばす如とくに棒にてのばし、細そく切りて蒸し、堅魚だし醤油をかけて食するか、てんぷらにして食するもよし。

いもの漬物

さつぱりとしたるものを好む人にはいもの三杯漬も面白かるべし。之れを作るには、正油一合、酢一合、酒

一合の割合を以て混和し三合のものが一合五勺計りになる迄で煮つめ、甘藷の皮をむき、一二分の厚つさに切りたるを漬けをき、甘藷の透明になりたるを度とし、食用となすべし。用ちゆる時きは、おろし大根をつけ合わせと爲すべし。

解かしいも

甘藷を解ける迄で湯出、葱を小さく刻ざみて、共に湯出、鹽、胡椒を加味して布にてこし、少量の葛粉を混じて更らに一と度び沸騰せしめ、身には湯出たる豌豆か、蠶豆を入れて食用とすべし。

手藝案内

「フランネル」の單衣

昨今は「フランネル」か「セル」の單衣に最も適當したる時候なり、玆に「フランネル」の裁縫を記すべし、大人物の裁方に於ては先に二尺巾の單衣物裁方の條に詳しく記し置きたれば、略して少しく注意すべき事は、寸法を定むるに「ネル」には餘分をつけ置く心得あるべし、何故なれば「ネル」は薄き毛織なれば、仕立たる上にて洗濯する時は、必らず一割許は收縮し、殊に身巾のつまるに至るなり、それゆえに仕立さる以前に一旦水に浸し、能く乾したる上にて裁方を施すべし、而して一領に要すべき端物の長さは普通木綿物又は絹物より少しく長きを要し、大低六ヤール半則ち日本尺にて大巾一丈五尺餘を要す、目下重に行はるゝは英國製と獨乙製なるが、英國製は地質緻密なるが爲め水に入れても著しき收縮を見ざれども、獨乙製は其地質柔軟なるが爲め英國製に比し收縮の度强し、此譯合なれば英國ネルなれば少々は獨乙ネルより布帛地短なるとも差支なし、現今の相場にて英ネル一ヤール上等五十五錢より六十錢まで、獨乙ネルは一ヤール上等五十錢より五十七八錢までなり、流行の詳細は家庭雜誌五十

二號流行の栞內に具に記しありしゆゑ玆に事々しく述ぶるに及ばず、然しながら其大略は山糸織又は京御召の珍柄を摸範として織り出したる巧妙を極むる品頗る流行す、先づ男子物なれば白茶、淡鼠、鐵色に棒縞又は徵塵なんど多く見受けられ、婦人用ならばいろ〳〵のかはり縞流行す、これは其人々の好々に見計ひて裁縫せば宜しかるべし。

筆の序に「セル」の事を報ずべし「セル」も水に浸せば收縮を見ると雖も「ネル」の半分にも至らざれば六「ヤール」もあらば大人の衣服も爲し得べし、其直段は上等にて衣服一着の價六圓より七圓、中等にて四圓八十錢より六圓、下等にて三圓七八十錢より五圓までなりといふ、其流行の色合、柄合は三十三號を參照ありたし。

三つばかりなる小兒が、漸く步き始めチヨコ〳〵として母親に連れられ步く有樣を見るに、「フランネル」の一つみに縮緬の兵兒帶を締め、美麗なる布帛の鉢卷ある麥藁帽子を被るさま、實に可憐極れり、子を持つ親は斯の如き衣裳せしめて遊ばせなば、嘸や樂しかるべしと思はれる、一體「フランネル」は頗る平民的にして殊に小兒の遊戲には、最も適したるものなり、雨にうたれても、色褪せず、土にまみれても汚るゝこと尠きは、到底縮緬類の華車にして非實業的なると同日の論にあらず、今より六月末頃までは小兒には「フランネル」單衣に限るなり、今三歲頃なる小兒の衣服則ち一つみの裁縫を案內せば左の如し。

先づ二尺巾二ヤール則ち日本の鯨尺四尺八寸の「ネル」地を取り、大巾一尺九寸の內一尺一寸を四尺八寸裁ちて身ごろとし(此四尺八寸の內よりおくみの不足を充す爲め其不足丈を取る、而して其餘の半ばに襟肩二寸明くべし、玆に一寸注意すべきは前みごろは襟肩より裾に至るまで縱斷するは言ふまでもなけれど、一つみ

にても後も縦斷して脊縫を爲す方出來上りの上躰裁佳なり）巾の殘り八寸の内三寸一二分長さ四尺八寸を裁ち去りておくみと襟とし、其殘り四寸八九分長さ四尺八寸を以て兩袖と積る時は、袖丈一寸二分、身丈二尺二三寸の小兒衣服を得べし、袖口はつけずとも宜しけれども、女の子ならば平袖にして何か赤い唐縮緬にても取合はせなば、面白かるべし、筒袖に製すれば小兒の運動上にも都合宜しく、布帛地も亦角袖よりも節儉に當れど、身ごろの製作は前と同じく、袖口に縮緬か何か見計ひて襞を取るは美麗なり。

布帛地は敢て本「フランチル」に限らず、近來西京西陣にて紀州織に優れる綿「チル」を織り出し頗る珍柄多かるより需用者の評判も宜し、鯨尺一尺七錢より八錢五厘なるものに至らば、なか／＼に躰裁本「チル」に劣らざるもの多かり、併しこれは小兒物には適すれども、大人物には強て「チル」を着たさゝうで面白からず。

風車摸樣の肘突

前號の手藝案内には小蒲團則ち梅花形の置物敷を案内したり、本號には稍それと相似たる肘突を記すべし。肘突は厚味を要するものなれば、心に綿を容るゝ爲め上下二枚を合はするやうにすべし、扨肘突は其名の如く肘突きに實用せらるゝと雖も、一方には常に机の修飾となるものなれば、充分躰裁よきやうに編むべし、其色の配合はいろ／＼なれど地を黄淺黄、又は桃鴇色にて編み、摸樣を黄鳶又は赤色等にて出すは面白し、茲に淺黄地にして赤の風車摸樣の肘突を製せんか最初淺黄糸もてくさり三個作り、元目に通して此輪の内に帽子抄(前號參照)八つを入れて帽子の編端の如くす、次に赤毛糸一本を増し、之より二本として右に作りたる心へ一個宛を隔てゝ編むこと赤と淺黄各々八回則ち都合十六の糸目となるなり。

斯の如く淺黄の上に淺黄を追て編み重り、又赤のくさ

りにては赤を二つ入れ、淺黄の上にては淺黄を入れ、順々に運ぶこと一廻りにして二廻目に移るなり。二廻目にては淺黄の上にて淺黄一つとなし、赤の目には最初一つ終に二つ宛廻りて編むも赤二つ宛増し行くのみ、右の淺黄の上にては淺黄一つ、赤の目には最初赤一つ終に二つなり。

右の如く編みて赤の目數七つ又は八つに出來たる後は赤の目の上の増したる目にて赤を一つにし、淺黄を一廻りし、それより赤の上にて淺黄二つとなし赤をへらす、而して赤の終りに唯だ一つになるまで淺黄をば順次に一つ宛増し行き、それより淺黄三廻り程編みて進行を止む。

斯樣なるもの二枚を製して裏表となし、内には眞綿か木綿をよき程に入れ、「ミシン」ぬひを施すべし。

雜文一斑

流行の栞

春夢

軸物及額面の表裝

少しばかり軸物及額面の表裝の事を記して同好の參考に供せんと欲す。

先づ大躰の流行より論ずる時は、掛物は從來雅俗となく文人風（上下の縁、風帶等の修飾なく淡泊なる修幅をいふ）大に持て囃され非常の勢にてありしが、近年は舊にかへりて一文字風又もや文人風の位地を排して之に代りぬ、其表具の寸法は普通式により一文字の上一寸ならば下五分なり、中は一文字の上を四倍して四寸、中の下は中の上四寸を半割にて二寸なり、上下の上は中の上四方を三倍して一尺二寸なり、上下の下は上下の上の半割にて六寸なり、何れも此割にて少し下をすかすかす風帶は掛物の巾一尺なれば七分、巾狹きは夫相應、兩脇は蠟帖(則ち巾の廣きをいふ、式によれば狹くて一寸八分なり）の方行はる。

表具に至りては上中下いろ／＼、又其人の嗜好にて一定せされど、矢張

上等なれば金襴、緞子、繻珍、綸子等を用ゐ、中等にて綸子唐綸子それより以下は紙裝なり、其柄の好みは書畫の種類に依りて見計ふものなれば茲に一定することは能はず、（紙表具の濫觴は利久居士が、笑嶺和尚の文を紫地印金の一文字に白唐紙の中風帶淺黄地の上下を用ゐたりしと、此一文字風帶を去り白の張風帶にせしは元伯なりき）

軸は一文字風にては象牙を第一の品とし角製之に亞ぐ、文人風にては紫檀が之に類したる木地類を好む、孰れも唐紙半折の巾にて出八分なるは言ふまでもなし（軸木は杉、上卷絹は淺黄、啄木は淺黄と紺との打分紐なるは舊によりて段の如く差したる異動なし）

扁額の表裝も上等なれば掛物と同じき織物なれど大抵は紙張なり、近來一寸面白きは屑織にて表裝したるもの、これはなかなか好し、縁木は塗物も宜けれど、神代杉などは淡泊にして面白し。

筆の序に表具師の事を記さんに、表具師は一名を經師といふ、蓋し往昔經文の卷物或は裏打仕立なるより起因して今に其名の殘りしならんが朝家の御表具の御用を代々勤めし大倉汲水と呼べる人は、書畫の鑑定に長たるをもて表具を廢し鑑定の專門家となり、其職は皆門人に讓り渡したると言へる所より考ふるも、經師の職は無學文盲にては叶はず、多少の學問と識見を備へざるべからざるを知るべし（併しながら坊間にある平凡經師は此限にもあらず）德川幕府の御用を勤めし表具師は十人扶持森有齋、五人扶持伊藤某、三人扶持辻某、此外扶持米なきもの石井某外三人にして、此職の重なるは書畫の表裝にて、直幅、横披、單條より襖、屏風、障子等なりしといふ。

糊は表裝の內最も大切なるものにて、原料は生麩なり、其製法は冬季（寒中殊に善し）に生麩を煮て糊となし、瓶に入れ密閉して床下の地中に埋め置くこと半年乃至一年永きは三年（豫め其瓶に製造の年月日を記す）而して後之を用ゆれば上乘のものなるが、安い張物にはつかはれず、重に上等の掛物などにつかふ、又東京は他國と違ひ武藏野の風荒く吹きすさむ土地なれば、掛物に風當り糊はなれ或は反りかへることも往々ある事なれば糊も加減して隨分強きを用ゆべし、此事本職は能く知り居ることなれど、手器用な素人衆に一寸注意の事なり。

書畫の流行は追つて書くべし。

手提、紙入、銀貨入

手提は男子用には矢張鰐皮の西洋革鞄第一等なるが、當今は女子用としては革鞄行はれず、頗る流行するは古代形なり、京橋區尾張町伊勢新にて賣る『四季袋』の如きは其一にして、布帛地を繻珍にし、菊、牡丹摸樣

評判宜しといふ。
紙入は男女共三枚折、形は左程大ならず小ならず、男子物にて長四寸二三分の處、女子物にて三寸四五分の處好し、布帛地は男子には鰐皮なれば男らしく、古代書更紗ならば大しぶなり、縫取も妙なり、婦人物には矢張古代書更紗の色と柄の派手なるもの、又は鹽精に書摸様新柄いろいろなり、繻珍は何處までもよし、裏地は摸様なしの鹽精の色氣よきものを撰ぶべし。

新形の銀貨入は澤山數多ければ記するに煩はし、近頃二枚折人氣に投し弗々使用するものを見る、延命嚢は相變らずの流行、黄金嚢は割に勢力なく、金錢出入の自由なるは蟇口に越すものあらじ。

流行の髮

前號には髮具を案内したれば、今號には夏向流行の髮の結ひぶりを案内す。

先づ丸髷の形にはいろ〳〵あり、歌舞伎形、米屋町形、牡丹形等其他各小間物屋にて種々なる名をつけて賣れども、當世の流行といふは髷形の長く品の宜しきを好む、髷には大中小あり、厚味のもの薄手のものあれど、夫は其人の年齢と嗜好に任せて可なり、近來其の代りに「しやぐま」の髷を用ゆるものあるなり。

島田髷は丈の長き方流行せず、去りとて短きも宜しからず、則ち中庸を得たる形にして是も亦意氣ならんより品格宜しくなれり、全体島田髷の風は藝妓社會が流行の源となれるが、近來此種の島田風（殊に新橋）大に高尚となりたるより來りしものか、委細は述ぶるに及ばず。」

銀杏返しは髷大にして、鬢の側より其影の見ゆるまでに至れり。

總して前髮は是迄は鷄卵形なりしも近來は末廣形とも申すべきか、細く起りて奥に行くに從ひ、巾廣に深く取りしものを喜ぶ、それゆゑ島田、丸髷、銀杏を問はず、髷の根は以前の如く高からず、併し髱を枕にする程にもあらず。

鬢、髱ともまだ詰りし方はやる。

勝山髷（丸髷の丈長きもの）を結ぶものを見受くれど、これは一種の社會にのみ限る。

三輪、天神廢れたるにはあられど、流行と申す程に至らず。

これから夏向なれば束髮や櫛卷や、おたらひの如き髮風盛なるに相違なし、束髮は矢張上卷にして此頃日本の櫛を使用するもの能く見受けらる。

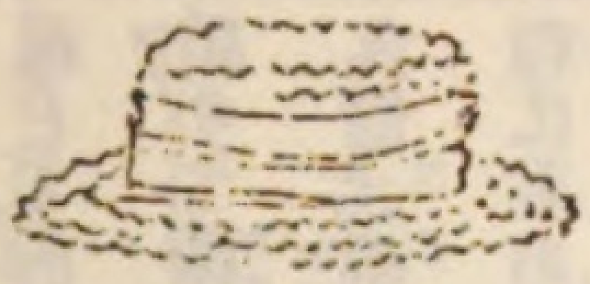
序に京都博覽會に出品せし櫻木淺吉が娘の人形兩個を造り、之に假髮入

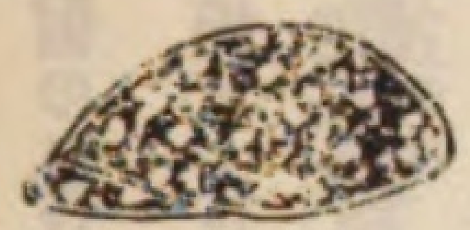
四十八種を添ねたるを記して我國にはいろ／＼の髮の結方あるを示さん。

すべらかし○葵つと下げ上げ○葵つと島田○竹の節の四種は宮中の女官及び宮堂上方のものにて○勝山○片はづし○葵つと片はづし○文金島田○奥女中○前がせ○お初の七種は武家がたに結びし者又町方の者は○芝雀○裏銀杏○立花くづし○横貝○兩手○江戶先笄○深川○丸髷○天保山○阿彌陀○立兵庫○横兵庫○太夫兵庫○三輪○鴛鴦○都鴛鴦○お染○ふくら雀○後褔髷○蝶々○貝蝶々○島田○低島田○投島田○かせ島田○元祿島田○禿島田○割しのぶ○割勝山○高髷○束髮○割り唐子○天神髷○都踊髷○桃割○かけおろし○大原女の三十七種なるが事の序なれば髷の博覽會をせんと此他婦女の髷に○兩輪○兩輪くづし○銀杏くづし○おばこ○棒貝つぶし島田○新蝶々○ウンテレガン○達磨がへし○櫛まき○お手洗○前褔髷○長船○かぶせ○唐人髷○夕顏○丸輪○皿輪○いびし○先笄○粹書○猫の耳○四つ目くづし○茶筅○浦島○唐團扇○トうなふ○うしろ勝山○手鞠○お三輪○政岡○蛸の足○かしく○のせ兵庫○かせ兵庫○れち梅○奴○向ふさき奴○大吉○思ひづき○もたせ○數寄屋○さん／＼○お茶の子○三光○兒輪○ひつこき○お巾○お長○ぐるり髷○ゆび綿○チヤンポン○松葉くづし○お千代○稲木髷○錦祥女○尖婦髷○切下げ○はゞせ○お田葉粉盆○髷下○かけおろし長一○同つぶ一の六十三種を得たり以上三都のものゝみを擧げしも實に夥しき數にて頭髮結法の複雜を極むる實に驚くに堪へたり。

夏帽子

本年の流行夏帽子は例年の如く麥藁製の鍔の狹きもの一般の人意に投ず、其編みかたは鬼あみ又は菱あみに限り、山は昨年と異るなし、鉢卷は其人々の嗜好に依ると雖も、黑か紺の「リボン」若しくは白羽二重若しくは同品浮模樣若しくは繻子の珍模樣あるは商人向にも、書生にも、紳士にも向く、(價三十錢より六七十錢まで)





單に書生向の大鍔三寸四五分のものは支那麥製にて鉢卷は紺又は白の繻子にて二十五六錢より四十錢位併し支那麥なれば頭の載物さするを厭せず此形は不流行となるも知れず、薄羅紗又は「セル」の猪口形はちよいと冠りには書生のみに限らず、誰れにても妨なし、淡色最も流行す、紳士又は官吏向にはパナマ形矢張流行、白羅紗も好し、小兒向には鍔の大なる麥藁製に海軍水夫形の鉢卷後に垂れたるものに及ぶものなし、山は高からざるを可憐の品とす、白の麻又は木綿のレース形は當歲より二三歲の小

見小女に着けば愛らしきこと限なし、併し此形は日本製になく、重に舶來品なれば直段も割合に廉ならず(四五十錢より壹圓まで)尋裝製小兒帽子は日本製にて却つて舶來品に優るもの尠からざれば內國製を需め玉へ、

團扇

團扇は毎年內國及び外國を合せて凡四百萬本餘の賣行あり府下の團扇問屋にて重なるものは日本橋區堀江町河岸に六軒、四日市に三軒外二三軒にして中にも堀江町の伊勢惣は其製造仕込高最も多く海外にも輸出し印付の注文も年年百萬本に下らず江の島、大磯、箱根を初め各地温泉場の注文も一手に引受け本年も大に內國通運會社より一萬五千本、日本鐵道會社より六萬本の注文を受けたりと云ふ今其商況を聞くに昨年迄は俳優團多分賣行きしも本年は皆無にして歷史團も幾分か好みを減じ文人團は相變らず賣行あるも日清戰爭團に押され陸戰、海戰等種々のもの三十餘通ありて田舍行きの注文頗る多し注文は總て名稱入れなり又團扇の極上等は絹張りにして自今の流行は戰塲の寫眞を絹に取りたるものなり柄は象牙にして一本の價三圓前後買目は貴族并に外國人向きなり又本年は日清戰爭等にて職人も減少し居るを以て手間賃も高く騰つて原料の竹并に紙等も高價にして加るに戰爭の爲め一般に元仕入れを減少せしが相場は別注文絹張團扇最上等一本二圓五十錢より三圓同紙張り極上等百本二十圓、上等十圓古代上等歷史團新版もの(蒙古征討を始め二十餘番は同家に於て彫刻注文中)百本五圓以上、差拵もの百本二圓五十錢より五圓、並文人團百本一圓小形中文人團百本七十錢、天紅玉子百本一圓、並俳優一圓二十錢、上直し役者一圓八十錢、本年新版役者は二圓二十錢、日清戰爭團は二圓より一圓五十錢、文人團上等百本二圓五十錢より一圓六十錢なり又來月より同家にて賣出すは戰地寫眞を張りたるもの何れも差拵として百本四圓位なり



理學的簪



圖に示せるは理學的簪にして向挿となる、富士山に雲を見せ、雲中に蛟龍を潜ませ、もし雨天なる時は、此龍三時間前に首を擧げて上天す、試みに水氣を以て山頂に點すれば龍徐に首を擧けて九皐に走る、又一個の簪を取つて之を見れば富士山の側面に一輪の太陽あり、若し雨氣天にあれば雲に沈み日和なれば赫々として天に冲す、眞に奇といふべし、妙といふべし、

これをこれ晴雨計簪とは申すなり、但し流行さなるや否やの孫青はしばらく預に致す。

日用品物價（五月廿一日）

◎白米小賣（一圓に付）●一等白米七升七合●二等白米八升〇〇●三等白米八升三合●四等白米八升七合●五等白米九升一合

◎雜穀（一圓に付）●本場大麥三斗三升五合●脇場大麥三斗四升五合●肥後小麥二斗一升●船橋小麥二斗三升●下總小麥二斗四升●地廻裸麥二斗二升●上等竹林麥一斗七升五合●中等竹林麥一斗九升●下等竹林麥二斗五升●上等割麥一斗八升五合●同中等二斗五合●同下等二斗二升五合●常陸稗五斗五升●山稗五斗

◎油（一樽に付）●地水九圓九十五錢方九十錢●井十圓六十三錢●荏油十三圓八十五錢●一川十圓六十八錢●桐油八圓三十八錢●胡麻十圓九十五錢●綿白八圓七十五錢●◇函入出來不申

◎石油（一箱に付）●ホーキ二圓三十七錢●タンク二圓二十二錢●新タンク二圓二十六錢●鶏印品切●上錨ロシヤ二圓四十一錢●チヤスタ二圓四十六錢●鹿印ローヤ品切

◎鹽（一圓に付）

●赤穗	三俵五分八厘	●木齋	五俵六分五厘
●大鹽	三俵七分	●新齋	六俵
●八家齋	三俵七分	●古積上	二俵七分五厘
●東濃鹽	三俵六分五厘	●同中	二俵九分

◎石炭（藏前一萬斤に付）

●唐津炭上	四十五圓五十錢	●三池粉炭	四十三四圓
●同次	四十三圓五十錢	●幌內炭上	三十三圓
●筑前炭上	四十一圓五十錢	●同次	三十一圓
●同次	三十九圓五十錢	●白水炭	三十四圓

◎肥料（一圓に付）

●內海赤大羽粕	三貫六百目	●同次	四貫四百目
●南仙	品切	●原岸小鰊粕上	四貫二百目
●腰長粕　同次	品切	●同中等	四貫三百目
●八戸腰長粕	品切	●同並物	四貫六百目
●同次粕	品切	●干鰯鹿寒引上羽	二杯四合
●新樽鯡粕上	四貫四百目	●同白中尺	三杯三合
●同並	四貫八百目	●新小尺	四杯四五合
●木樽鯡粕	品切	▲十樽に付	
●鰊粕上	四貫二百目	●鰯油近海物	四十二圓
●同中	四貫三百目	●同北海物	四十四圓

◎綿類（一圓に付）

●本坂上銘大入	七百目	●三州別改九入	七百八十目
●尾州上銘十入	八百目	●三州上銘九入	八百目
●遠州上銘九入	八百目	●地綿特別九入	八百十目
●同並文庫	八百五十目		

▲外國綿之部

●上海白綿特別	八百二十目	●同白錦上銘等	八百四十目
●同二等白	八百五十目	●同白雜銘物	八百六十目
●同相上綿上等	一貫百目	●同相上綿中等	一貫二百目
●同赤綿有德	一貫二百七十目	●同新赤綿大德	一貫三百目
●同隆德印	一貫三百十目	●同森記	品切
●赤綿順德	三貫三百六十目		

雜録

東都の貧民

（下谷小石川四谷三區、帝國濟民會の調査したるものに係る）

下谷區貧民　戸數三拾五戸　人口百廿三人　居住町名　山伏町、萬年町、豐住町、中徒町、長者町、箪笥町、谷中三崎南町、入谷町、龍泉寺町、南稻荷町、坂本町、上根岸町、中根岸町、金杉下町、

	戸數	族籍	性別	七十歳以上	六十歳以上	五十歳以上	四十歳以上	三十歳以上	二十歳以上	十五歳以上	十四歳以下	計	總計
極窮民	三	士三	男	一	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	二	五人
		平〇	女	二	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	三	
窮民	一、一	士一	男	二	三	〇	三	一	〇	三	九	二、一	五十一人
		平一、〇	女	〇	二	〇	三	五	三	二	一、五	三、〇	
細民	二、一	士三	男	一	七	四	四	三	四	三	五	三、一	六十七人
		平一、八	女	〇	三	六	三	五	四	二	一、三	三、六	
計	三、五	士七	男	四	一、〇	四	七	五	四	六	一、四	五、四	百二十三人
		平三、一	女	二	六	六	六	一	七	四	二、八	六、九	

小石川區貧民　戸數四十一戸　人口百卅九人　居住町名　音羽町、原町、初音町、下富坂町、久堅町、掃除町、鍵町、雜司ヶ谷町、小石川水道町、關口町、柳町、指ヶ谷町、

	戸數	族籍	性別	七十歳以上	六十歳以上	五十歳以上	四十歳以上	三十歳以上	二十歳以上	十五歳以上	十四歳以下	計	總計
極窮民	七	士〇	男	〇	一	三	〇	〇	〇	一	一	六	十五人
		平七	女	三	一	二	〇	〇	二	〇	一	九	
窮民	一、三	士一	男	三	一	〇	二	一	二	三	九	二、一	四十五人
		平一、二	女	〇	二	二	三	三	四	一	八	二、三	
細民	二、一	士五	男	二	三	四	四	二	四	一	一、二	三、二	八十人
		平一、六	女	二	四	二	七	六	四	七	一、六	四、八	
計	四、一	士六	男	五	五	七	六	三	六	五	二、二	五、九	百三十九人
		平三、五	女	五	七	六	一、〇	九	一、〇	八	二、五	八、〇	

四谷區貧民　戸數三拾貳戸　人口百拾貳人　居住町名　鮫ヶ橋谷町、忍町、南伊賀町、右京町、傳馬町、大番町、南町新堀江町

	戸數	族籍	性別	七十歳以上	六十歳以上	五十歳以上	四十歳以上	三十歳以上	二十歳以上	十五歳以上	十四歳以下	計	總計
極窮民	三	士〇	男	一	〇	〇	一	〇	〇	〇	二	四	五人
		平三	女	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一	
窮民	一、五	士二	男	二	三	一	三	一	〇	一	七	一、八	四十二人
		平一、三	女	〇	六	一	五	三	一	一	七	二、四	
細民	一、四	士二	男	〇	二	四	四	三	三	四	一、一	三、一	六十五人
		平一、一	女	一	二	三	三	三	六	四	一、二	三、四	
計	三、二	士四	男	三	五	五	八	四	三	五	二、〇	五、三	百十二人
		平二、七	女	二	八	四	八	六	七	五	一、九	五、九	

古井水

九皐漁史譯

老師ジヤコツブは余に向ひて、行はいとほしき甥よストラスボルグへ行けそして汝の學業を成し遂げよ天は實にこの困難なる秋に際り汝をして敎法の師たらしめんとぞ命じ給ひぬ又わが無二の友なるシユナイデルはよくこの神慮を奉ずるならん

此シユナイデルといへるは余が伯父ジヤコツブが大學に在りし時の同窓にして「ベテヂクト」派の僧と爲りて博學の譽高き人なりきそして余は此頃伯父の膝下に在りて伶人と爲り書記と爲り堂司と爲り居たり又余は會堂を掃除し亮なる聲にて祈禱を爲し日曜日或は祭日には大なる銅の香爐を振廻したり何その他の日には師の僧達に事へて奔走に身を碎き居たり

されば老紳士も頻に余が進歩の著しきを賞で余も亦心私に此言を信じて抱負すると輕からざりし何となれば此頃余は實に祈禱をもて天の余に命じ給ひし尊き職業と爲し後年圖らずも余が身を委ぬるに至りたる戰爭の事には更に思を運びしと無かりしかば

君は此頃余が信心の如何ばかり堅固にして又余が學殖の如何ばかり深かりしかを想像するに難からん余は羅甸語をもて談話すると美しきアルサチアン、フレンチの上音を使ふよりも速なりし又余は議論に於ては極めて容易に近隣の「プロテスタント」敎の僧徒を説伏せたりしかば之が爲め遂に余が居る地方にて彼の敎の不信心者等相結びて騷擾を釀すに至りたるとさへありき又余は一日に六回の祈禱を爲し一週間に三度の斷食を爲し懺悔の時には獨樂と同じく全く感覺を失ふに至るまで左右の脇腹を鞭ちぬこれを余がスタインバハの里なる伯父ジヤコツブの許に在し時の淸淨なる生活とす

余等が家族は永く此地に住み居たりしが當時は其廣大

なる地所と愉快なる家屋とは今一個の叔父エドワードの所有と爲りゐたりこのエドワードといへるは余が祖父の第三子にしてジャコップはその長子なるが余が思ふには彼は三歳の時より一身を敎法に捧げて夫より以來六十の今日に至るまで信心たえて怠りあらざりき長子斯の如くなれば余が父は次子として方に祖父の後を紹ぐべきに聞くならく余は無道の惡漢にて家の内常に睦じからず果は烈しき風波を起して後帆を揚げて巴里に奔り其處にて世渡し其處にて歿りぬその歿りしや遺されし余が憐なる母は漸くに六ヶ月なる嬰兒の余を懷にして悄然として故鄕に彷徨ひ來りしが祖父は父の故をもて固く余等を拒みたりさりながら幸にして親切なる伯父ジャコップの慈悲によりて身を措くの居を得又懇なる待遇をも享くるに至りたり

此處にて母は殆ど七年の餘命を繫ぎぬその歿りし時老紳士は倘玩具と美味とに餘念なかりし幼き余に勝りて溢るゝ謝淚をその墓に濺ぎかけたり

斯る間に祖父も亦同じく歿りぬその歿れる時前に言へりし如く季子エドワードに與げて財產を讓り又其孫なる余にも些少の貯を分てよと遺言したりき

叔父エドワードは早く婦を失ひ只其紀念として余より三歲長けたるメリーといへる一女兒を愛育したりげにこの一女兒こそ吝嗇なる父に神の惠み玉ひし無上の寳といふべけれ斯くてメリーが成長して三五の春を迎へたるとき五個の農夫と三個の牀師と十二個の「プロテスタント」敎の僧と一個の士官の婚姻を言ひ納れしとありきこは何故といふにメリーは素容色の婉麗なるが上に程なく許多の財產を享くべき富裕の相續者なるとこの紳士等のよく知るところなりければなりさりながらメリーは一々その請を退けて斷然と寡居せんと主張し全く父の保護に身を委ねたり

伯父ジャコップは宛ら聖僧らしくは義人が道の爲めに身

を殺すとを惜まざる如く己が身にひきかへてメリーを鍾愛みたり又余は其頃年既に十二にも達して居たりしかば彼を見ると尊き神の如く日曜日に共に會堂にて歌うたふときそが跪きて顏を赧ふし羞を含みて天使の如くに祈れる樣を見るときは强ひて顧みざらんと欲するも得べからざりき倚メリーは容貌の嬋妍なるが上にくさ〴〵の技藝に達して巧に琴を彈じ輕く舞踏を爲すは其最も長ぜしところなるのみか浸物の加減と料理の鹽梅とに至てはアルサスの婦人中又其右に出づる者なかりきされば流石の强慾なる父も此上メリーに對しては何の不滿に思ふところなし又伯父及び余も何の希望を抱くとなかりしそしてメリー自らは只管余等が無事幸福を見るを樂みて其他にはまた何の願もあらざりき

此頃メリーが親切に余をいたはりしとはなか〳〵に一朝一夕にして言ひ盡すべきにあらず彼が早朝余が書齋に來りしときは如何に其日の麗にかゞやきしかば余が脫ぎすてし小き法衣を如何に叮嚀に疊みしかは又祭日祝日のためとて余が冠物余が法衣に如何に鮮なる縫箔を爲しゝか又神机を飾らんとて常に如何に美しき花を持來りしかはさどれ是は數十年の昔の事にて今覽らるゝ如き半白の髭の下よりは最早面白く當時の情を語る能はず請ふ姑らく之を恕せ

メリーが余を愛せし事かく種々なりしが就中その最も好みたるは屢ゝ余を接吻せし一事なり此事余は初の間は夫程に價値を措かざりしが年を經て次第に其眞味を解するに至りぬされど其眞味を解するに至りては彼が余に與ふると却て其度を減じ果は余が十四歲に達せし時彼は全く此事をやめて只余が粗暴の情に嗾かされしとき彼が太く欲せざるを强ひて奪はんとするとあるのみに至りぬ

一日余はこの事に就きてメリーと立廻り首尾克く望を遂げて退かんとせしとき端なく叔父エドワードの認む

るところとなりて己が額上に却てまたゝかなる鐵拳の見舞を祟り嬉さの餘りか覺えず花園の中へ二步三步蹌き出でゝ地上に平伏したるとありき

吝嗇なる老紳士は常に其財嚢と同じく口を開くとの極めて稀なるにひきかへこの時雄辯泉の湧くが如く渾々として口を突いて迸り出でければ余はあまりの意外と再び喫驚したりげに叔父が何事に關してもかゝる雄辯のあらんとは是まで余が絶えて知らざるところなりき怒れる情の言葉忙しく余を祝して後彼はメリーを顧み又同樣の會釋を爲し世辭を播き始めぬメリーは最初よりこの光景のたゞならざるに恐れて身を縮め居たりしが父が言葉の穩ならず且彼を罵ふるの甚しきに大に怒りて

この兒は漸く十四の少年にて併も御身の甥なり倘夫のみか既に敎法の道に入りて程なく尊き神に事ふる身分にあらずやされば父上よ御身が今この兒に對してかゝる言葉を發し給ふは實に御身の恥辱といふべく且妾とても御身が實の兒なればかく過言を憚り給はざるは均しく御身の恥辱とこそいふべけれ

余も亦此時の叔父の說諭には甚不服なりしが伯父にはその效能やありけん此事遂に傳記の最初に引きたる言葉の源因とはなりぬ老紳士は兒に勸むるに疾く余をストラスボルグへ送りて其處にて修業せしめんとを以てし兒も亦その說を納れければ余は遂に伯父の舊友なる敎授シユナイデルを訪ひ就きて神學幷に希臘語を研究せんために一封の添書をぞ授けられし

このストラスボルグの地は余夙に觀るべき數多の奇觀あるとをきゝゐたりしかば今や親しく遊ぶの機を得て敢て不快の感あるとにはあらねども美しきメリー親しき老伯父と永く相別るゝ期の漸くに近づくかを思へば怏々として胸の裡穩ならずさりとて此事今は最早止まるべきにもあらねば一日機を伺ひて私にメリーを招

き曇れる聲にて離別の悲を述べしが—メリーも亦同じ思にやありけん最後の別と確く余を抱きしとき余は宛ら水に浸し丶海綿の如くに潸然と涕泪を兩眼より溢らして暫時の間は堰きもあへざりしされど亦恠しむべきかなこの時余熟々—メリーの顔を打見守りしにその兩眼は晞きて一點の露だになく全く余を愚弄するものか或は淑女の身として年纔に十四の小兒を慕ふことの餘りに愚なるとを悟りしものか余に對しては更に何の關係もなきもの丶如くに飽くまで冷淡の裝を爲し居たりされば余もし是より一ヶ月を經て彼が余に贈りし思の文を見ざりしならばその心中を察するとを得ざりしならん又思ふにこの文を認めしときは慥に傍に見る人のなかりしが文字の半は流れ落ちたる涙に洗ひ去られて纔に意を解くまでなりしは噴壺を用ゐるもこれ程にはと思ふばかりなりし

（未完）

鵜舟

（口繪の譬解き）

俊成

夏の夜に川舟にて鵜をつかひつ丶鮎を捕る。之を鵜河とて、闇の夜に水にうつらふ篝火の影など其眺め面白し。美濃の長柄川にて最も多く之をなす。

古は其他の川にて之をなすものとて、古歌に見へたるもの少なからず。山城の大井川、梅津川、桂川、大和の戸名瀬、夏箕川、吉野川、皆其名所也。

大井川かゝりさしゆく鵜かひ舟
いくせの夏の夜をあかすらむ。

時事一斑

御還幸

畏くも天皇陛下は、久しく廣島及び京都の大本營にましく〳〵、日宵軍國の事に大御心を勞し給ひしが、愈よ遠からず京都御發輦にて、東京宮城に御還幸あらせるゝとの事也。

帝國教育大會

二十三日京都に開會したる帝國教育大會の問題は下の如し。

帝國教育大會討議問題

其一　初等教育部

第一　幼稚園に入るへき年齡を四歲以上とするの可否

第二　尋常小學校第一年及第二年の教育には男女教員孰れか教育の効果多きや

第三　小學校生徒に柔術擊劍等の如き武藝を授くるの適否

第四　全國小學校教科用圖書を一定するの可否

第五　幼稚園兒童の組別をなすの必要ある場合に於ては同年齡のものを一團とすへきや年齡長幼を交錯して一團とすへきや

第六　男女を分界して教育するの益

第七　小學校生徒に木銃を廢して眞銃を持たしむるの可否

第八　幼稚園を經て小學教育を受くるものと學齡に達するを待つて入學せしむるものとは如何なる點に其利害得失ありや

第九　尋常小學校の正教科目中に圖畫の一科を加ふるの可否

第十　高等小學校に於て男女教科書を別にするの可否

第十一　公私用とも「候」文躰を廢すること

第十二　幼稚園に於て幼童と共に子守を開誘室に入るゝの利害如何

第十三　小學校に於て其土地重要の實業科を併課せんとするには如何なる方法を設くへきや

第十四　小學校作文科中私用文には生徒に教科書を持たしむる事を希望す

第十五　小學校其他各種の學校に於て生徒の躰格を撿査し之を參照比較する事

第十六　教育祭を起すの議

第十七　氣質偏重なる兒童の爲に特に一種の學校を設くる事

第十八　小學校の兒童に尙武の氣象と艱難に堪ふるの躰力を養成せんには如何なる方法を設くへきや

第十九　小學校に於て一學校長の管理すへき兒童數を三百人以下に限制するの可否

其二　中學教育部

第一　中學教育を擴張する際に於て數校を設立すると又數箇所の分數場を設けて下級生徒を養成するとは其利害如何

第二　中等教育の學校に於て各年級の試驗程度を以て嚴重に生徒の學力を判定して合格不合格を定むると其程度を寛裕ならしめ同成同年齡者をして同年級に置くとは何れの方針を取りて可なりとするや

第三　中等教育の生徒に新聞雜誌を讀ましむるの利害

第四　尋常中學校の教育を規律的教育とするの利害

第五　尋常中學校に於て毎日の教授時間を不平均ならしむるの利害を問ふ

第六　中學校に於て躰育の一部として擊劍柔術科を置くとせは何年級より置くを以て最適當とするや

第七　中學教育の漢文科は第何年級より課するを尤適當なりとするや

第八　尋常中學校歷史科に於て左の如く其配當をなすの可否如何

第一年級　日本歷史傳　　第二年　日本歷史

第三年　東邦諸國史　　第四年　西洋諸國史

第五年　日本歷史

第九　中等教育の寄宿舍に於て同年級を以て組合を編成するの利害如何

第十　中等教育に於ける數學英語等の教科用書に解式若しくは直譯をなす事を禁止するの可否

第十一　中學校に於て論理科の教授は如何なる方法を用ゆるを最適當なりとするや

其三　高等教育部

第一　將來關四大學を京都に設置するものとせは如何なる分科大學を以て最急務とするか

其四　女子教育部

第一　高等女學校に於ては自活的技能を授くるを主とすへきか將た內助的婦人を養成するを主とすへきか

第二　女子の躰育は如何なる方法に依るを以て最適當なりとするか

第三　女生躰操科受持は男教員女教員何れを適當とすへきか

第四　高等女學校に於て漢文を併せて課すると課せざるとは讀書力及作文力を養ふに差異なきか如何

第五　高等女學校に於て漢文科を置くときは何第年級より課するを適當とするや

其五　實業教育部

第一　簡易農學校の建築は普通農家風を可とすへきや將た西洋館作りを可とすへきや

其六　學事經理部

第一　小學校教員の不足を補充するの方法

其七　社會教育部

第一　海軍教育の振興を謀り國民一般に海國志想を養成する方案如何

第二　海事志想を養成するの教育方は如何

（各二問同時に討議するものとす）

第三　新聞紙上の小說に關し小說記者の注意を喚起するの議

第四　寄席及興業物の教育上に於ける弊害を矯正するの策

第五　每年若しくは數年每に時を期し地を定めて玩具共進會を開くこと

第六　玩具改良の奬勵を設くるの可否

（右二問は同時に討議するものとす）

第七　通俗講談會普及の方法

第八　近視眼豫防方法

附　記

申込期限を經過し提出したる問題は開會期日迄に之か採否を決定すへし

（完）

敎育界の時論見るべき也。

海國日本の膨脹

昨年六月より本年本月に至る日清戰爭中に、船舶の增加せるもの極めて多く、遞信省にて其間に航海免狀を下附したるもの實に九十五艘。

若し之を細別すれば、東京三十七艘。神戶二十二艘。大坂七艘。越中五艘。小樽五艘。越後四艘。長崎四艘。伊豫三艘。筑前三艘。靜岡二艘。備後一艘。伊豆一艘。

其內四十一艘は內外國を航行すべきもの、十七艘は內海を航行するもの、三十七艘は近海を航行するもの也。

又船質を以て區別すれば。鋼質十五艘。鐵質卅一艘。木造二十九艘。

いづれか是れ海國日本の膨脹を意味するものにあらざらん。

福音同盟會

福音同盟會は京都府會議事堂に於て本月七日より九日まで開かれたり。

家庭叢書第九卷

社交一斑

一冊十錢
郵稅二錢

例により新聞評を掲ぐ

◎家庭叢書第九卷として出づ、社交上一般の要旨を解く例によりて簡明平易殊に稿末禮式一斑を添へしは用意懇到(讀賣新聞)

◎本書は家庭叢書の第九卷として發刊せられたるものなり記事頗る平易にして理會し易く常識ある婦人に取りて實に好侶伴といふべし(國會)

◎家庭叢書の一なり洒落なる小冊子にして一讀社交の新智識を得るに足るべし(都)

社交の方法を巨細に說き、附錄として禮式一斑を添へたり、若き書生などには、相當の才學ありながら社交の方法を知らざる爲め、人に疎んせられて志を得ざる者往々にして之れあり、此等の人は此書を一讀すべし、(東京經濟雜誌)

家庭叢書外號

家庭理財

定價十錢
郵稅二錢

此書の便利有益にして所論の着實、材料豐富なるは玆に多言を要せず、其目錄の大要は、序論、第一章貯蓄(一)郵便貯金(二)貯蓄銀行(三)普通銀行(四)保險—生命保險—火災保險 第二章投資(一)公債(二)株式と合資(三)投機、雜說(一)負債(二)家計(三)歲計豫算(四)帳簿(五)利息(六)損傷紙幣の交換、結論等なり、要は何人の家庭にても容易に理財の道を知らしめ且つ實行せしむるに在り

本書に對する批評

◎貯金、保險、公債、株式等に就き、一家經濟の整理法を最も實際的に論記したるもの也、家計の事に疎き書生上りの紳士などは此の書を一讀せば益を得ること多かるべし、(經濟雜誌)

◎各種の貯蓄保險、公債其他家計等の事を面白く丁寧に記述せるは流石民友諸君の技倆なり其才木牛流馬に及ぶとや評すべき(日本)

◎一家の經濟之を投ずるも之を貯ふるも其道を以てすればよし、所謂一家金錢の取扱法を巧みにするは實に家庭和樂の基なり家庭理財一篇此邊の消息を說く實に丁寧親切(讀賣)

○家庭叢書第一卷 家庭の和樂 定價十錢 郵稅二錢

○家庭叢書第二卷 夏の家庭 定價十錢 郵稅二錢

○家庭叢書第三卷 玩具と遊戲 定價十錢 郵稅二錢

○家庭叢書第四卷 家庭教育 定價十錢 郵稅二錢

○家庭叢書第五卷 小兒養育 定價十錢 郵稅二錢

○家庭叢書第六卷 家庭衛生 定價十錢 郵稅二錢

○家庭叢書第七卷 家政整理 定價十錢 郵稅二錢

○家庭叢書第八卷 簡易料理 定價十錢 郵稅二錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可



東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行